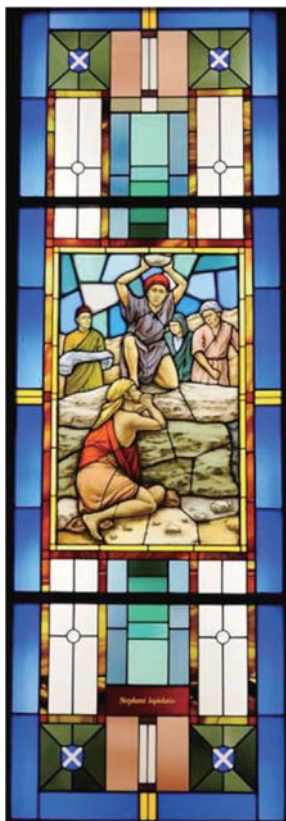


# 出会い (25)

— キリスト教講演会・講和集 —

2014年度



桃山学院大学 キリスト教センター

桃山学院の「キリスト教精神」

## 「自由と愛の精神」

桃山学院の学院章には、“SEQUIMINI ME”（我に従え）という言葉が刻まれています。それはイエスの弟子アンデレがイエスに従ったように、「自由と愛の精神」をもっていきることです。使徒パウロが書いています。「あなた方は、自由を得るために召しだされたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。」（ガラテヤの信徒の手紙 5 章 13 節）

自由には他者への愛と責任がともないます。「自由」とはひとりの人格と主体性を尊重すること、「愛」とは互いに仕えあいながら他者と共に生きることです。この「自由と愛の精神」は、単にキリスト教の立場だけでなく、すべての人間が一致しうる普遍的な理念であり、人類共通の目標です。

人間のそのような可能性を開花させながら、高い理想をめざしてチャレンジし続けていくこと、それこそが桃山学院の一世紀を超える伝統が目指そうとする「キリスト教精神」であり、「世界の市民」への道なのです。

# 目 次

## 第1回キリスト教講演会（2014年10月17日 金曜日）

講演テーマ：「ピンチはチャンス！？

人生って捨てたもんじゃない！」

講 師：アーサー・ホーランド氏

（アーサー・ホーランドミニストリー主宰）

..... 1～33

## 第2回キリスト教講演会（2014年10月28日 火曜日）

講演テーマ：「世界の市民として生き抜く力とは

講 師：姜 尚 中 氏（聖学院大学学長）

..... 34～64

講師略歴 ..... 65～66

[第1回キリスト教講演会]

## ピンチはチャンス!?

# 人生って捨てたもんじゃない!

アーサー・ホーランド

Good afternoon! こんにちは、アーサー・ホーランドです。今年63歳を迎えました。先ほど見てもらったビデオは3年前の（日本縦断十字架更新の）ものです。現在の活動としては、アメリカ大陸を歩いている最中です。サンタモニカからシカゴの手前のスプリングフィールド、イリノイ州まで3200キロを歩き終えて、後は、ニューヨークまで1600キロを残すばかりとなりました。



丁度、（米国横断十字架更新は）先月に一旦中断して、4月20日の雪も溶けて寒い時期が終わった春の頃から、また再び、その最後の最終ウォークをするつもりです。このチャレンジは、3年前の日本縦断十字架更新の時から計画していたものです。

日本は母親の母国です。僕はアメリカ人と日本人の両方の国籍があるのですが、母親の母国である日本列島を歩いて感じたことは、日本人ならば、日本をこの足の裏で歩きながら、日本を体験したい味わいたいということ。日本人でも自分の国を隅から隅まで歩くことは、ほ

とんどないだろうね。単純に1日32キロ歩いても、6ヶ月かかりますから。3700キロ目標にして歩くことを考えると、1日に7～8時間は歩きっぱなしってことです。ちょこっと30分ぐらい休みを取りますけど。

アメリカ（こ行進）では、夜中の2時に起きて、3時に食事をして、4時にホテルを出て、4時15分から歩き始める。まだ朝日が登る前。空は、真っ暗で星が照り輝いている。そして、月も輝いている。そのうちだんたん月も星も何処かへと消えていき、暁、曙、日の出が出てくる。毎朝、日の出を見ながら感動しながら、歩き始めるんです。実を言うと、アメリカって昼の2時～4時は非常に暑いですね。特にカリフォルニアのモハビ砂漠という、50度以上の灼熱ですから、生卵を車のボンネットに割って出すと玉子焼きが出来るぐらい暑い。僕は日射病になってから、（暗い内に出発することを）学んだんです。人間ってやっぱり自然から教えられるんですね。

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの星の王子様を読んで感動して、彼の本はほとんど読み漁りましたよ。『人間の土地』という本を書いています、夜間飛行士でパイロットで、空を見たり、星空を見たり、大地を見たりして、色んなことを考えさせられた。彼はクリスチャンですが哲学者でもあるんじゃないかなど。またアーティストでもありますよ。僕、夏目漱石やアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの表現力に感動するんです。彼らの表現力の素晴らしさはどこから来ているのだろうか。それは彼らの観察力の鋭さだということがわかった。じっくり観察するがゆえに、彼らはそこで色んなものを感じ習得し、それを文字に、また言葉で表現するのだと。アーティスト、表現者というのは、やはり観察力の鋭さが求められる。そのためには、

じっくり自然の中に浸るということも必要。忙しいとは、心を滅ぼす、心を亡くすと書きますが、私達は忙しい社会の中で生きています。静まって、俺がお前を愛してやまない、普遍的な存在であることをしれよ。という有名なバイブルの言葉があるけど、静まらないと、物は心で観るんだというのが見えてこないわけです。聴覚・味覚・視覚・感覚、チェケラは余計だけど乗り越えて。俺たちは心で感じるという所を、養っていく必要がある。

マザーテレサが日本に来たとき、今心の時代を日本は迎えている。年間3万人近くの自殺者。亡くなった小淵政権から小泉政権、阿部政権、福田政権、麻生政権、管政権、鳩山政権、野田政権、そして再び今の阿部政権。ここ10～4.5年、3万人突破し続けている。去年は少し3万人を割った。でも、一人の自殺成功者の背後に10倍の自殺未遂者がある。安定剤を飲まないで心が落ち着かない。睡眠薬飲まないで寝れない。そこまで人間はきちゃった。車で言うと、アイドリングが高くて、正常なアイドリングになかなか戻すことができない、世の中の常識だ、世間体だというけど、世の中の常識は非常識であり、人の目や人の声を気にしながら、己を見失っている人間が数多くいる。やはり自立するというのは、自分というものを見つめ、そして弱さも知り、弱い時にこそ強くなれるんだという事を体験して、勇気をもって一步を踏み出す人間になる。そういう意味では、特に学生のみなさん。学校で当然義務教育で学ぶことはいっぱいある。そして、学ぶことは大切だ。でも知識は人を高ぶらせる。大いなる存在を愛することこそ、「知恵」の始まりだ。知識以上に必要なのは「知恵」。「知恵」とは、知る恵と書く。恵を知ると言うことが大切なんだ。私達はいつの間にか、この隔離された社会の中で、地位だ名誉だ肩書だ、そ

して当然、資本主義を保つためには組織を作らなくてはいけない。組織の中にはルールができる。そしてそのルール、常識的なルールを守っていけばいいのかというと、人間はそれだけじゃだめだ。

『夜と霧』という本を僕は年に2回読む。600万人のユダヤ人がナチスドイツのイデオロギーのもとで虐殺された。人間がこんなひどい事を、人間にするのか。歴史はそれをちゃんと記録している。精神科医のビクトル・フランクルは、もう本当に究極的な状況のなかで、生活してたわけです。今日死ぬかわかんない、明日死ぬかわかんない。そういうところで生き残って帰ってきた人が、どういう人かと言うと、感動する事を忘れなかった人だと彼は、その体験談に基づいて語っている。蚕棚みたいな部屋でみんな震えながら、今日死ぬかわかんない。明日死ぬかわかんない。ガス室に入れられたら、その死体は山積みになされ、蠟人形のようにマネキンのように、死体は横たわってる。髪の毛はいでクッションにして、背中のはいでランプスタンドのカバーにしたと。同じ人間が人間に対してこんなひどい事ができるのか。いつ死ぬかわかんない。ある者は、頭がおかしくなる。病気になる。そして死んでいった人たちも大勢いる。そういうときに、あるものが、その蚕棚みたいな部屋で震えている、多くのユダヤ人に対して、「お前たち外に出てこれを見せろ」。フェンスの向こう側に、太陽が沈んでいく。空はオレンジ色。このアウシュビッツの収容所キャンプのなかは地獄のような場所。でも地獄のような場所から、自然をみてみんな感動する。こんな美しい景色があるのか。その瞬間、シュワーっと心の中の恐れ、今日死ぬかわかんないという恐れがあっという間に消え去った。有るものは、水たまりに写っている、木の枝に最後の一つの木の葉が風に揺られている。それが、水たまりに写ってい

る、それを見ながら5年前にみた、あの感動したレンブラントの絵を思い出した時に、地獄のような場所を恐れていたのに、それを観た時に、5年前の感動が読みがって、生きていこうという気持ちになった。無関心、無感動、無気力って、よく使われる言葉ですけど、彼らは、感動したがゆえに、生きていこうというそういう思いが泉のように内側から沸き起こってきたというんです。感動したものは、帰ってきた。人間感動することが大切です。そして、感動させるものって結構あるんです。でも私たちは、そういうものに目を向けず、忙しく目の前にやらなくちゃいけない、責任？当然責任は果たす必要があるでしょう。でもあなたが使ってる携帯電話でも充電器が必要ならば、あなたのハート、魂ははるかに充電が必要なのは当たり前のことです。願わくば、この空間も少しはみなさんの魂が充電されるそういうときになればいいなという思いで話しています。

僕は何を話すかわかりません。だいたいメッセージは準備するものではなくて、メッセンジャーそのものだと思ってますから。その人を通して醸し出す、野の花には香りがあり、野の花には輝きがあるように、僕の表現者としての究極は、語らずにして語る。かっちょいいー。でもこんだけ語っちゃってる。要するに、先生が俺を紹介してくれて、ニコッと笑って立ち去りたい。えっ？何今のは？それだけでも語ってる。そういう人間になりたい。男は背中と語るという表現もあるけど。まあそれは理想主義的、非現実的かもしれないけど、非現実を理想とするところが、人間にある。日本の「粹」の構造という、「粹」と言う美学もそういうものです。似ているところがある。

このアウシュビッツで生還した人たちは感動する事を忘れなかった。サン＝テグジュペリは空を飛んでいる時に、いろんな景色を見て、



そっから学んだ、自然界はいろんなことを教えてくれるんだと言うんです。大地は万感の書物より、人間について多くを教えてくれると、彼は謳っています。自然界は、万冊の本読むよりも我々について大切なことを教えてくれると言うんです。何故ならば、大地自然界は人間に抵抗するからだ。人間は抵抗されたときに初めて自分のなかにある、本能、また本領発揮するんだ。ピンチはチャンス。絶望は希望への窓口。問題のただなかに解決の糸口もあるんだということを私たちは学べるんだ。結局抵抗する自然界があるがゆえに、農夫は畑を耕すために、この抵抗する自然界に対して道具を生み出すんです。スキという道具を生み出すんです。抵抗する自然界があるがゆえに、大工は家を建てるためにカンナを生み出すんです。抵抗されたがゆえに人間のなかにある素晴らしい可能性を生み出すんです。もし今日みさんが、ピンチに立たされて、壁にぶつかって、この先、俺の人生どうなるかわからないと思う時。それは、素晴らしい事なんです。ピンチかもわかんないけど、それは大なるチャンス。自分を発見するチャンスで、また己の弱さを知るチャンスで、強くなる秘訣を身につけるチャンスでもあるわけです。

バイブルの中にこういう言葉があります。様々な試練に会った時、それをこのうえもない喜びとしなさい。あなたの信念、信仰が試されていると、忍耐という物が生じるのをあなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、何一つかけた所のない成長とを遂げた完全なものになるからです。この暗記力の素晴らしい。試練にあったとき喜び、あっはっはー。これは違うよ。そういう喜びじゃないんだよ。内側から、チャレンジしながら不安があるんだけど、人間なんて自信のある奴なんていないんだよ。最初から自信

持つような奴ってのは、空自信なんだよ。人間は自信ないんですよ。多くは。勇気もないです。でも自信もないし勇気もないけど、一步踏み出した時に不思議だけど、それに向かって生きているという喜びが内側から湧き出てきて、チャレンジする喜び。これが大切なんです。自信以上に大切なのは喜びなんです。

有名なある一人の人の詩があります。ニューヨーク大学リハビリテーション研究所のこの大学にも研究所あると思うんだけど、ニューヨーク大学、リハビリテーション研究所の壁に亡くなった患者さんが、一つの詩を書き残しました。こういう内容でした。

大きなことを成し遂げるために、力を与えてほしいと神に求めたが、謙遜を学ぶようにと弱さを授かった。

偉大なことが出来るようにと、健康を求めたが、より良い事をするようにと、病気を賜った。

幸せになろうとして富を求めたのに、懸命であるようにと貧困を授かった。

世の人々の賞賛を得ようと、成功を求めたのに、得意にならないようにと失敗を授かった。

求めたものは一つとして与えられなかったが、願いは全て聞き届けられた。

神の意に沿わない者であるにも関わらず、心の中の言い表せない祈りは全てかなえられた。

私は最も祝福された。

かっちょいいー。祝福されたのだ。祝福ってね、英語で“Blessing”。

発音良いだろ。“Do you understand ?” ガソリンスタンド、電気スタンド、読売新聞。これ吉本興業のギャグなんだけど。おもろかったら笑え。悲しかったら泣け。ここなんだよ。俺教会でよく話すんだけど、教会のクリスチャン程、偽善者はいない。ここは違うよ。ここは違うよ。呼ばれたんだから。だいたい仮面かぶってるやつが多いんだよ。俺、偽善者だけにはなりたくない。みんな心の中では泣いてるのに、顔は笑ってる。俺が育ったころ、三船敏郎という人がコマーシャルに出ていました。男は黙ってサッポロビール。男は涙をみせちゃいけねえ、心で泣いて顔で笑うんだ、いいな。どうやってんだよ、それって。心で泣いて顔で笑う。建て前本音使い分けながら。世渡り上手に生きる。バイブルの中に、真理はお前を自由にするよという言葉がある。真理と言うのは、普遍的な存在にたとえられる。神とか仏だとかいわれる。でも、その真理に行く前に、お前にとって真理は何かという事を、自分自身に問いかける必要がある。その真理を無視して、見えない真理なんて掴めっこない。俺は今悲しいんだ、今嬉しいんだ。頭に来てるんだ。切ないんだ。それが真理なら、そういう自分をまず受け止めるところから、始まるんだ。

悲しむ者は幸いだ。その人は慰められるからである、という有名な「山上の垂訓」という言葉がある。その言葉を聞いた、ガンジーは、このジーザスの言葉ってスゲー！って言って、教会に行きたいって教会に行ったけど、人種差別されて、二度と教会に行くもんかと彼は開き直った。しかし、そのジーザスのスピリットを胸に彼は、無暴力の行進をした。その行進に感化されたのが、マーティン・ルーサー・キングだった。ジーザスをリスペクトし、ガンジーの生き方をリスペクトする。その彼の書斎に両方の写真が飾られ、彼は無暴力運動をし

ノーベル賞を取った。最後は暗殺されて死にましたけど。悲しむ者は幸いだ。その人は慰められるから。悲しみを無視して、慰めの世界は開かれない。自分のなかに悲しみがあるんだ、と受け止めた時に、慰めの世界があるんだということに気付ける。自分の影をみながら、まさにこの影は自分の虚しさ、貧しさ、寂しさ、悲しさを表している。でもその影が濃ければ濃いほど、お前の背後に照らす光は明るくて強い。かっちよいいー。

光は闇のうちに輝いている。闇は光に打ち勝つことは出来なかった。日本人は、白か黒か丁か半かで物事を決めるのが、嫌な国民ですよ。DNAのなかに2000年の歴史がある。僕は、アメリカ大陸を歩きながら、カリフォルニア、アリゾナ、ニューメキシコ、そしてテキサス。オクラホマ、ミズーリ州。ミズーリ州に出てきて、初めてアメリカの歴史が出てくるんです。アメリカはたかが200年の歴史で、歴史があまりないんです。その時に、日本ってすげーなって思った。自分の身体の中に流れている、母親の血筋。先祖のDNA、日本人の血を持っていることを誇りに思いました。アメリカに行って。アメリカの歴史と言うのは、ミズーリ州あたりから、南北戦争がここであったという歴史なんです。日本は2000年の歴史があるわけですよ。そういう意味では歴史が薄い場所ですよ。自然界を歩きながら、サン＝テグジュペリのように。また、夏目漱石のように色んなものを見ながら、自分を見つめ、考えさせられる時が多々ありました。ただ、忙しくしている事だけが能じゃない。時間をとって自分を見つめるひと時が必要。自分のなかにある、喜怒哀楽を無視してはならない。その心理を無視すると、その向こう側にある、大いなる存在。俺達への思いがなかなかわからない。

日本人は春夏秋冬が好きですよ。春は何を感じさせる。命。夏は何を感じさせる。楽しい。海は広いな大きいな。行ってみたいなのよその国。チェケラ。笑っていいんだよ。秋は、枯葉。落ち葉が落ちてるぜ。俺も落ちるのかな。落ち葉に隙間が、俺の心にも隙間。落ち葉風と共に去りぬ。俺も去るのかな。冬と共に死ぬのかな。春夏秋冬を日本人はDNAのなかに持っている。同じように俺たちも心の四季がある。喜怒哀楽っていうんです。この喜怒哀楽の真実を無視して、見えない心理なんて知る事は出来ない。悲しいなら悲しいと認めろ。泣きたいなら泣くことも必要だ。怒りっぽくなることだってある。常識だとか、健全な市民はと言われたって、確かにそれは理想で、そこに近づきたいけど、理想と現実のはざまのなかで、そうじゃない自分が居るんだという事を、見栄を貼らずに受け止め、認めてあげる。

あなたでしか、あなたの事を受け止められない。人にわかってもらおうと思っても、人自身が自分の事がわからない。自立するという事は、自分の事を知る事でもあります。

やはり、日本の活躍した先人達は、そういう見つめる、己と向き合う時間をちゃんと持っていた。夏目漱石は49歳でこの世を去る。そして彼は、英国に留学に行くけれど、ちいちゃな日本人として色んなことを言われて、劣等感を感じ、うつ病になる。しかも十二指腸潰瘍を患った。そうとう悩み事がいっぱいあったんだろう。そりゃそうですよ、小さい頃2歳の頃、いろんな家に養子にあてが得られ、そして帰ってきた。再び戻ってきたら、親父はお金持ちだったけど、金で失敗する。結局金がらみの問題で、いろんな人が家を訪ねてくる。だから、坊ちゃんのなかでもいろんな書物のなかでも、人間は金によって、変わってしまうという事を、彼は多々書いています。引きこもり

がちだった彼が、このままずっと沈んではいけない。そして彼は、勇気を出して、草枕の冒頭の中で。

山路を登りながら、私はこう考えた。「智に働けば角が立つ。情に棹せば流される。意地を通とおせば窮屈だ。とにかくこの世は住みにくい」。住みにくさが講じると、安いところに引っ越したくなる。安い所に引っ越してもそこも住みにくいと悟った時に、詩が生まれ画が生まれる。何言ってるの漱石ちゃんと聞きたい。結局引きこもりがちで、落ち込んでた、でもこのままじゃと勇気をもって一步を踏み出した。

僕は某有名な車会社の従業員に講演してくれて、研究者の前で講演した事があります。その研究者の中で働いてる皆さんよりちょっと年寄りの人達は、夢を持って、その会社に入って、誇りを持って、その会社の昔のそれを始めた、もう亡くなった会長さんの、そういう生き方に感動して入ったものの、全然そういうスピリットは失われている。夢を持って入ったけど、全然違う仕事をさせられて、鬱になってしまう。パニック障害を患い、家から一步踏み出すこともできない。そういう、ストレスを感じるようになってしまう。たまたまそういう講演会に行って、話をきいて感動してくれて、彼は、僕の東京のど真ん中、新中野でやるライブハウスに話を聞きたいんだけど、電車に乗るとパニックになるのでいけないと。心配するなど。まずは家から一步踏み出す練習をしろと。一步踏み出したら、今度また家に戻ればいい。その後は2歩踏み出して、また家に戻ればいい。コンビニの近くまでいけるようになったら凄いいじゃないか。一步一步でいいんだよ、という話をしました。一步踏み出すのに勇気がある。結局日本列島を歩くんだと人には言える。でも一步踏み出さないと、ゴールは一

歩近づかない。人生って言うのは焦るんじゃない、慌てるんじゃない。じっくりゆっくりでいい。一步一步進めば必ず目的地に到達できる。みんなが夢を持ってるなら、夢に一步一步踏み出すことだ。その次はまた一步一步。走らなくてもいい。じっくりゆっくり進んでいけばいいということです。結局、夏目漱石も勇気を出して一步一步を踏み出した。

一步一步踏み出した時に出会いがある。僕も日本列島、一步一步踏み出した時 1000 人の人が一緒に歩きたいとやってきた。歩きながら、もうカウンセリングタイム。色んな悩み事を俺に言ってくれるわけです。僕はただ聞いているだけ。そして、僕に打ち明けてくれたら、元気になって帰っていく。俺は何もしていない。まさに自然界の教会。俺よく言われるんです。アーサーさん教会持たないんですか？うん、持たない。どうしてですか、持つと来て欲しくない奴等が来るから。俺わがままだから。俺の教会知りたい？この自然界。かっちょいいー。この青空、この白い雲、この夜空、この星々、この太陽、この月、これ俺の教会の天井。このサハラ砂漠、海の大海原、この草原、おれの教会の床。鳥のさえずり、虫の音、これ俺の教会の讃美歌。吹く風神の愛のスピリット。天は私の王座、地は私の足台。お前たちはどのような家、教会、お寺、神社を俺の為に立てようとしているのか。これら自然界みてみる、俺の手が作ったではないか。という有名なバイブルの言葉がある。だから俺はね、宗教施設と言うのは茶室のような場所であるべきだと思う。茶室は、外の大宇宙を体感する小宇宙の空間なんですよ。この建物は、時代とともに古くなる。学校が破産したら、この建物は売られてしまう、無くなってしまう。これは、建物ですよ。建物をたらしめるのは、中に居る人。あの世界的に有名な安藤忠雄が、「建築家の中に人が入った時、建築は最高の物になる」と言って



ます。結局、建物以上に大切なのは、中に居る人。人ひとりがどのような人間であるかが大切なんです。結局、アウシュビッツでも、このとんでもない仕打ちを与えるドイツの指揮官が残酷な事をするのに、コンサート

にいくと涙流して感動している。人間って一体何なんだ？トップのドイツの指揮官が、自分のお金で薬を買ってきて、それをユダヤ人の病気をしている囚人にあげる。こんな優しい指揮官もいた。今度は同じ囚人の仲間のユダヤ人が、仲間に対してとんでもない仕打ちをする。人間って一体何なのか。その人の人間性が問われるんだと。

神を信じますか、仏を信じます。宗教やってるやつなんて気持ち悪いやつらが多すぎる。俺が言うから確かだ。のっぺらぼうヴァンパイアに血を吸い取られて、生きるしかばねが、放心状態で、感慨です。こわー。みたいな。お前みたいになるなら、なりたくない。結局、信じているものが素晴らしいなら、お前を通して魅力というものが現れる。問題は何をどう信じるのか。それが自分の人間性に力を与え、魅力を与えない限り、周りの人は別にそんな俺は信じなくても良いよとなる。でも日本のことわざの中に、この人を見てると仏を見ているようだ。という言葉がある。仏を見たことがないけど、仏が居るならこんな人の事をいうんだろうなど。それは褒め言葉で使われる。信じてるものが素晴らしいなら、あなたの表情に表れる。自分の顔が水に映るかをと自分の顔が瓜二つのように、あなたの心もあなたを映すます。これはソロモンの箴言という、知恵の言葉。



結構日本のビジネスマン、僕は日本のビジネスマンや社長さん達に講演会に招かれて。僕は教会にはよばれない。教会1回は呼んでくれるけど、2回は呼んでくれない。だいたい教会の信者や牧師から、ビデバビデブー状態に追いやられる。役員会議であいつ読んだのは誰だとなって、10年間お呼びが来ない。10年ぶりに声がかかって、なんで呼んでくれたのというと、批判した役員が心臓まひで死にました。キリスト教会には呼ばれないけど、浄土真宗の尾張地区大会に呼ばれました。僧侶300人。みんな黒い袈裟に丸坊主。彼らは高級ホテル貸切。そうとう葬儀で儲けたんだなと思ったけど、片隅において口には出さなかった。後ろ振り向いたら、十字架は無い。親鸞の掛け軸。僧侶さん達はみんなタバコを吸いながら、神の宮は煙で満たされたとはこの事かなと思った。何について話してほしいのと聞いたら、布教活動のやり方について話してくださいと、この人達の方が、柔和だなと。俺は、親鸞蓮如法然はマイブラザーというから、余計に教会に招かれなくなった。結構ね、浄土真宗の僧侶がお忍びで講演会に来てくれるんです。この前岐阜の講演会に20人来てくれた。青年会議所で呼ばれた時に、終わったら、俺のCDをひとりの僧侶が20枚買ってくれた。今日は別に販売されてないけど。アーサーさんの話は講和に役立ちます。親鸞、蓮如、法然、仏教界のカリスマ。難行苦行ではなく偉業念仏優しく祈れと法然は言った。頑張ってる歯を食いしばって祈るのではなく、優しく祈れ。それに帰依したのが、親鸞。自然法爾。自ずからしからしむ、我が計らいによらず向こうから働きかけ、他力の力によって救われる。それに帰依したのが、蓮如。本願他力、他力本願。この、他力の源は慈愛に富んでいて、罪業、凡夫、罪多くあるどうしようもない人間を見捨てることが出来ずに、向こうか

ら手を差し伸べてくれる尊い存在なんだと。まさに、これはバイブルの中のでてくるアメージンググレイスと同じじゃないか、こういう事を言うから教会から呼ばれなくなる。だから俺、宗教の隔ての壁乗り越えちゃってるんですよ。牧師と言う肩書を脱ぎ捨てようと思うんですけど。金魚のふんのようにひっついてくる。ふんざりがつかない。

こういう表現を今しないと、宗教はポピュラーな時代じゃなくなつた。特に原理主義的になると、イスラム教徒の原理主義、キリスト教徒の原理主義、十字軍が戦争だ！どこに愛があるんだ！どこに隣人への愛があるんだと。世の中は宗教は怖いもんだと思われてる。俺は宗教をやってないから、宗教やってるような人間に見える？俺、キリスト教も嫌いだと言っている。キリストは大好きだけど、言ってる事わかんねーだろ。俺は、ジーザスという存在に惚れてるの。俺の為に命を張ってくれた。しかも真っ裸なフルチンの姿で、十字架にかかってくれた。二葉亭四迷が愛という言葉を日本に初めて持って来た時、明治時代、このように訳した。あなたの為なら、俺は自分の命を捨てても良いよ。えー、俺の命を捨ててくれる存在がいる。人の子、友として人の子ジーザスが、あなたのために、命を十字架の上で捨てる、これよりも大きな愛は無い、というバイブルの言葉を、二葉亭四迷はどこかで読んだんだろうね。

ラブ、愛という言葉は、あなたの為なら、私は自分の命を捨てても良いです、と訳した。十字架はまさに義理と人情の、源なんだと。こういう話するから、教会に呼ばれないんですよ。

でもヤクザの親分さん、現役の親分さんとか右翼のトップが俺の話聞きに来てくれるの。親分さんにやめろとは言わないの。暴力団排斥ってあるけど俺には関係ないんですよ。俺の仕事というのは、お医

者さんと似ていて、分け隔てなく人を癒す。心のケアをする、彼らが悩み問題があるなら、聞いてあげる。アドバイスする。金儲けの為にやってませんから。人の心を豊かにする仕事ですから。そうすると、娼婦とか、ヤクザとか、ヤク中とかが多いんです。案外、健康的な奴は俺の所に来ないんです。みんな世の中からはみ出し者になって、世の中の末端のヤク中や、ヤクザ、売春婦が来るんですよ。しかし彼らの方が、健全といわれる人間よりはるかに正直。自分自身の中に苦しみを持っていて、働かざるを得ない。そういう人に俺は、やめろと言わない。ありのまま受け入れて、その人たちに、俺が感じるメッセージを伝えるだけですけど。ヤクザの親分さんと話す時に、親分さん、僕はヤクザ映画を観て育ちました。菅原文太、高倉健、鶴田浩二みたいなヤクザになる人は、そういう人柄、一匹狼、粹な生き方に憧れて入るものですよ。結局入ってみたら、そんな親分さんは居なかったとみんな失望しちゃう。みんなはったりとか、かまして、義理と人情を語る。論語読みの論語知らずばかりで、本当の義理と人情のある男はどこにいるんですか。親分さん、本当にあなたが親分として活躍していきたくれば、義理と人情の源を魂のロッカー、このジーザスの生き方、足跡を歩んでみるといいですよ。そしたら、集会終わった後、アーサー先生今日は燃えました。私も良いヤクザになります、とわけわかんない事言いながら帰って行った。この前結構マスコミで騒がれてる、某有名な親分さんの子分に呼ばれて、親分さんが会いたって言って、バンに載せられてあるマンションの一角に連れていかれましたよ。俺の言った事、気に障ったのかなと。そしたら、その強面の親分さんが、アーサー先生、洗礼を受けたいと思うんですが、どう思いますかと。良いじゃないですかと。ちいちゃい頃、駅前で救世軍がクリスマスの

募金活動をしていた。そこでみんな讚美歌を歌っていた。その音色を聴いて、なんか子ども心に暖かいものを感じた。こわもてのヤクザの親分、色んな問題を起こしてる。でもひとりぼっちになったら孤独になって、怖い思いが実はある。神にすがりたい。矛盾だけど、人間は矛盾ですよ。そして、そういう信仰心を持ちたい。ピンチに立たされた時、自分の心が振るわれる。

みんなは今、自立街道まっしぐら。でもあるものは、親が一生懸命働いて金貰って学校に来ている。あるものは、アルバイトしながら自立の道を歩んでいる。日本は豊かな国ですよ。GNP 世界 2 位、3 位。僕はこの前アフリカに行きました。一か月に 60 の講演したけど、アフリカの人たちの寿命は 60 歳ですよ。しかも一か月の給料 16 ドル。1600 円ですよ。日本じゃ生きていけない。彼ら必死で生きてますよ。でも目は輝いている。一か月間、僕はアフリカに行って、60 の講演会した後。何故そうなったかという、ちょうど渋谷のあるボンダール、浜美恵という有名な女優がスタジオを持っていて、そこが売却されて教会になっている。講演会を頼まれた。そしたら、そこに不法滞在していたアフリカの奴がやって来た。涙流しながら、アーサーさん、僕はアーサーさんの話に感動してアフリカに帰って牧師になります。母親、両親に手紙を書いたら、こんな所で牧師になったって生きていけない。給料もほとんどない。法律を破ってもいい、不法滞在して仕送りしてくれと。使命与えられた人間は違う。人に何て言われようと、使命って命を使う。志が与えられたら、それにまい進したいという情熱がある。そして彼は牧師になって、4 年の後、電話かかってきた。“Mr, Arthur. This is John.” ついに私も牧師になりました。アーサーさんに約束していました。必ず牧師になったら、アフリカに招待

する。今回は是非招待させてください。60の講演会を一か月に計画しています。計画しすぎだよ。アフリカに行くなら、できればホテルはちゃんとしたテレビのあるホテルをお願いします。テレビ観たいんですよ。ストレスも発散したい。聖書ばかり読んできると、堅苦しくなるから。祈ってばかりいると、わけわかんなくなるから。やっぱりテレビ観たいわけです。ファイブスターホテル、オクケーですと言われた。そして、その代り条件があります。飛行機代とホテル代は自分で出してください。招待じゃねえじゃん、みたいな。

結局辿り着いて、60の講演会した。貧しい所ですよ。俺だけが、ある意味で白人ですよ。彼らみんな黒人ですから。電気も悪い、ある所は、1万人が夜の集会に来る。そして、なんか電圧器で電気をともしながら途中で切れちゃうから真っ暗。彼らは真っ黒。白い目、白い歯しか見えない。そういう場所でメッセージしました。結局、謝礼が700ドル。7万円。60の講演会で東京でオフィス持って、半端じゃない費用がかかる。マイナスどころじゃないマイナス。でも彼らにとっては、尊いお金。俺に700ドル。これが私たちの心からの献金ですと貰った。貰った瞬間にジョンは泣き始める。明日から、生きていくお金がない。汚ねえなあ。結局わかつたよ、これは俺が貰うといったら、俺はどういう人間だと。結局それあげましたよ。そしたらその万年筆も素敵だ。その靴も。結局俺ははぎとられにいった。駅前で、飛行機に乗る帰る前、彼は言った、来年もまた呼びます。二度と来るもんかと思った。

飛行機に乗って日本についた時、なんて平和な国なんだここはと。そして電車に乗ったときに、学生達が車内で本を読んでいる。漫画の本を読んでいる。でも目はどんよりしている。でもあのナイジェリアの子

ども達の目は貧しいけどキラキラギンギン輝いている。この違いは一体何なんだ。いつの間にか、鍋の中のカエルのようになっている。鍋にカエルを入れてとろ火で火をつける。だんだん水が暖かくなって、カエルはいい湯だなアハハんと、言ってるか言っていないかわからないけど、お湯が沸騰するとカエルまで沸騰している。ニーチェという有名なロシアの、アメリカに移民した文学者が、社会は鍋の中のカエルのような社会だと。人間は鍋の中のカエル状態になってる。いつの間にかヒューマニズムの中で、安全安心の神話の中で、心地よい生活をしながら、一番大切な己の魂を見失っている。まさに、魂を取り戻さなければいけない。そういう時代ですよ。宗教云々は本来、魂の話をするはずだけど、いつの間にか宗教も形骸化しはじめている。そしてスピリットをなくしてしまっている。空気の抜けたタイヤは前に進むことが出来ない。ひとり一人、スピリットが必要です。そのスピリットが情熱を与え、志を与え、使命を与え、そして自分は何をすべきなのか、というところに目が開かれていくわけです。

昔の先人たちは、切羽詰まった時に必ずそういう事をしました。夏目漱石もそうです。日本の美学は「間の美学」というんです。だから部屋のいろんな仕組みも、奥の間、茶の間、床の間。人間って人の間って書く。武道で間合いが必要という。舞台も「間」。この「間」の美学を日本人は持っている。ていうことは、あなたも「間」が必要なんです。忙しい時には「間」を作ることなんです。今回の講演を聞くと言うのも、「間」なんです。いろんなモチベーションでこの場所に来たかもしれないけど、人の話を聞くと言うのは、ある意味で、謙虚になって何かここから学ぼうと、俺は、何かを教えると言う人間じゃないです。ただ、自分の体験に基づいて、感じる事を感性で表現する。

その表現がみなさんの心に何か伝わって、俺はみなさんの中に可能性があるの信じてます。信じてないのは君なのかもしれないけど、俺は信じてます。俺の仕事というのは宗教家の人達は、みんな神を信じましょうというんです。

でも信じましょうというなら、言ってる人を信じてあげないといけないんです。でないとそこに、矛盾がうまれますから。人を信じるということは、裏切られる可能性が十二分にある。特にヤクザとか薬物依存症者や、娼婦の人たちを関わっているとはったりや、かましや、嘘を平気でポーカフェイスで言う奴もいるんです。悪い事をするためには、ウソを積み重ねながら、所々でウソをいいながら、生きていくから、心も頭もおかしくなってしまう場合があるんです。そういう人達をも信じてあげて、そいつの良い所の可能性を信じてあげる。そいつのダメなところをとやかく言うんじゃないく、そいつの良いところがある。お前が存在すると言うのは素晴らしいことなんだ。お前がいるということは、どれだけの人が幸せになれるか。お前は知らないかもしれないけど、お前のなかに凄いものがあるよ、と俺はいつもそう思ってます。だから今日も、みんなの中に凄いものがある。それに少し気付くきっかけに、俺の話がなれば嬉しいなど。そういう意味で僕の働きは気付かせ屋という分野の働きなのかも。あなたは高価で尊く、愛されている存在なんだと。あなたは価値がある。「物とか事には価値があるけど、人間には尊厳がある」とカントは言っています。あなたには尊厳がある。あなたは唯一無二の存在であり、オンリーワンなんだと。

俺は、いつもメッセージする時、これが最後かもしれない。「一期一会」という言葉が好きです。「一杯の茶をたてる、これが最後

一人の客人をもてなす、明日有るかないかわからない。今しかない。私は…」。

有名なヒデルという人が言っていますよ。

もし私がそれをしなければ、誰がするのだろうか。

しかしそれを、自分のためだけにするのなら、私は何だろうか。

そしてそれを今しなければ、いつするのだろうか。

タルムードを書いたヒデルが言ってます。

もしそれを私がしなければ、誰がやるんだ。使命をもった人間というのは、人がやるから俺もやるんだからと、最初はスタートするけど、こいつらがやらなくても俺がするんだと言うのが、使命を持った人、志を持った人。それを己の名声や栄光の為にするのは、何の意味もない、世のため人の為でしょう。そしてそれは、いつかまた今度は逃げ言葉なんです。永遠にやってこない。今しかないんです。今でしょ。あいつ、これから真似たんだよ。今しかないんだと。だから、今この瞬間が全てだと思ってますから。63歳になるとね、結構俺の周りの友達死んでいく奴がいます。ガンとか交通事故。みなさん若いから、死の話するとポピュラーじゃないけど俺は、ある程度、山で言うなら、頂上のぼって下山の時で、下山の方が危険性が十二分にある。死という物を見つめながら歩んでますよ。死は我々の心に真に靈感を与える、哲学の天才であるって、ショーペンハウアーが言ってます。「死の存在が無ければ、おそらく一人の詩人もうまれなかつただろう」。トーマス・マンが言う。「私のすべての思考は、死ののみによって刻まれたものだ」と。ミケランジェロが言ってます。「人生を熟慮したければ、死から始めなさい」と。ダライ・ラマが言う。「明日あると思う心の 仇桜」。明日の桜の満開をみにいこうっていったって、夜中に嵐



がきたら、花卉は全部散っている。死はある日突然、盗人のように私達のもとにやってくる。なんの予約もつけないで、土足で上がってくる。ですから、いつ俺らが死ぬかわからない。今日も朝電話があって、この前イスラエル旅行にいった元右翼の人。しかもイスラエルで暴れて大変だって。そいつは警察に捕まって帰ってきて、僕に謝った。信頼して連れて行ったら、飛んでもない立ち振る舞いして、警察にまで捕まって、後に帰ってきて、東京都知事選挙へ出たい。どういうやつだと。それがダメだったんで、名古屋のじゃない長野の知事なるために選挙に出る。俺と同年。ガールフレンドからメールが来て、彼が癌で亡くなりました。人の命ってあっという間ですよ。あんだけ元気に生きてたのが一瞬にしていなくなってしまう。死は我々の心に真に靈感をあたえる、哲学の天才である。「散る桜残る桜も散る桜」。良寛。あの一茶は、「ああ美しや、障子の穴の天の川」と歌ってこの世を去った。その一句前が、「いざさらば、死の稽古せん花の影、死に仕度いたせいたせと桜かな」。桜の花びらが散っていくのを見ながら、この花卉は死の稽古を、そして、一茶は散る花びらを見ながら、俺もいずれ散っていくんだと。死の支度俺は出来てるのかなと。この桜はおれに語りかけてるのかなと。

日本人で、全ての宗教もルーツは自然界だから。自然界の営みを見ながら、何か学ばされるんですね。日本人は虫の音を聞いて、詩を書く。世界でもまれな国民だと言われている。自然が語る。自然に対して、リスペクト、謙虚になる時に、人に対しての謙虚な姿勢が表れてくる。そういう、美学を日本人はずっと持ってたわけですよ。鴨長明という人がいます。方丈記を書いた人。100年に1度の未曾有の出来事って私達は最近よく聞くけど。100年間生き続けられないから、覚

えてる奴がないだけの話で、日本は絶えず震災、火山の爆発、110以上の活火山があると言われている国に、安全安心の神話なんて通用しませんよ。人間は科学万能になってそして傲慢になっているだけです。この、宇宙を見上げる時一つの銀河系、どれくらいの大きさかと言うと、厚さ1.5万光年、長さ15万光年。A型のてんびん座だから調べてみた。でも俺、光年がわからない。学校でいつも勉強1番か2番だった。後ろからだけど。だから学校では勉強しなかったけど、ああいう空間の中で勉強というとプレッシャーを感じてしまう。でもそういうのが無くなると自分の意志で学んでいきたいくなるわけです。厚さ1.5万光年、長さ15万光年。1光年がわからないから漢和辞典で調べた。1年に光りが進む距離。9兆4600億進むと、1年に光が。厚さ1.5万光年。どれくらいの数なんだよ。長さ15万光年。中に2000億の星がある。しかも銀河系には1800奥の銀河がある宇宙に。1800億×2000億もう頭こんがらがってくるよ。浜辺で砂握りしめて、その指の間から砂が一粒一粒零れ落ちる数が、宇宙の星ですよ。星を研究する人が、星に名前付けたとか、今どれだけの名前を知ってるとか、知ってる名前より、はるかに知らない名前の方が多いんだと、謙虚になれよって話ですよ。人間は知識を持つと、傲慢になってわかってると思うけど、何もわかっていないという事に気付いてよ。へりくだるものこそ、恵みという物が自分に与えられることをしれる。謙虚になれよ、へりくだる心をもてよ、何でもわかってることじゃないくて、わからない事の方が多々あるよ。俺は、牧師じゃない。求道者だという。求め続けるかぎり進み続ける。わかったととまっちゃうと、成長は止まってしまう。

鴨長明の時代。100年に一度の未曾有の事が起こりました。1200

年代、当時の首都は京都でした。

金持ちは豪邸を建てる。豪邸を建てて、己の見栄を張りたいのか。どんな豪邸を建てても、地震がやってきたら崩れる。金持ちはまた金を使って家を建てる。竜巻がやってくる。そして3分の1の京都が焼け野原になる。疫病がはやる。そして4万7000人の人が亡くなって死体が河川敷に山積にされている。今回の地震、津波で2万人の死者行方不明者。当時、鴨長明の1200年代の時代、ひと夏に4万7000人が亡くなった。尊い我々の同志、同胞ですよ。それを観た時に鴨長明は人生は無常だ。この無常観というのが、日本にある。要するに、日本人はブルーズなんですよ。白か黒か、丁か半かはわかりやすいけど、真実はその間にあるんだって思う国民なんです。だからブルーズなんです。

変わるものと変わらないものの緊張感のなかに大切な心理がある。宗教の先進国の国の人たちは、案外唯一の神という概念を信じます。でも日本人て1つに絞れない傾向がある。八百万の神や、自然界の中に命が生存する。アミニズム。そういうものをシンクロナイズする国民ですから。そういうものは、劣った人種たちがやることなんだと、アメリカンインディアンや、アフリカの部族たちが、そういうカテゴリに日本人をいれて、彼らは何もわかっていない。愚かな人種なんだと思われてた時代があった。でも今こそ、こういう日本人の感性こそ、物事を相対的に見る。足もあれば、胴もある。みんな体の一部。そういう相対的に見る、そういう見方というのが、これから求められていく。唯一原爆を体験して、そして平和のメッセージを伝える国。しかし、まだまだ伝えきれていない現実が今もあるわけです。結局変わるものと変わらないものの緊張感の中に大切な真理があるんだと考える国民

です。無常だと、鴨長明、当時人生 50 年の時代で 50 を迎えた。無常観のピンチに達した時、成就したい。要するに豊かさを体験したい、虚しさ、貧しさ、寂しさにおぼれているだけじゃなくて、豊かさを得たいとピンチをチャンスに変えるために彼もまた一步踏み出した。みなさん、一步踏み出す勇氣ですよ。鴨長明も夏目漱石も、靈巖洞で五輪書を書いた、宮本武蔵も、みんな一步を踏みだして、行動に移しているわけです。周りがなんと言おうと己と向き合う時間。そして彼は何をしたかと言うと、どこに入って行ったかと言うと自然界に入って行った。面白い事に、サン＝テグジュペリ、鴨長明も、そして夏目漱石も、自分というものと向き合うために、自然の中に入っていった。自然が己の鏡なんでしょうね。

サンスクリットの世界で、人生を 4 つの時期に分ける。1 つは学生期、学んで生きる期間。幼稚園から大学院のことを言うのかもかもしれない。2 つめは、家住期。家庭を支え、社会を支える時期。壮年の人達でしょう。3 つめは、最後に持ってくるとして、4 つめは、遊行期。遊園地の遊に行くを書いて、遊行期。ガンジス川のほとりで、死体が埋葬されてるのを見ながら、死ぬ時期を迎える時期。この学生期、家住期、遊行期の手前をサンスクリットの世界では、林住期と言います。林の中に住む期間。そういえば、五木寛之さんが 5 ～ 6 年前に林住期という本を出してます。鴨長明は、このブルーズのなかで情緒豊かさを得たいと、行動に出た一步踏みだして、自然のなかに入って行って、岸辺に立ってこういふ。岸辺に立って川の流れをみる。川は流れ来ては流れ去って行く。流れは絶えないが流れている水は常に変わって行く。流れが淀んで渦巻いている処に、泡が浮いている。泡は消えまた出来る束の間の命。人の命も世の命も流れ行く水の様。そこに出

来る泡の命と同じ様なもの。

日本人ですよ。どこにいった、そのような日本人。泡はでき、また消える。そこに命の尊さを感じる。あの「虞美人草」をかいた漱石は、美しい女性を花にたとえた。俺、太宰治の本も結構読み漁りました。太宰治は結構自分の武勇伝を語り、女性のみる価値観も彼なりの価値観がある。それも一つの見方でしょう。でも漱石は非常に紳士的で、女性を美しくとらえた。美しいという捉え方は色々あるだろうけど、「虞美人草」の中には、紫の花に女性に譬えた。くれないを弥生に包む昼たけなわなるに、春を抽んずる紫の濃き一点を、天地の眠れるなかに、鮮やかに滴たらしたるがごとき女である。自分が何言ってるかさっぱりわからない。でもこの自然界の春の夕焼けの時にこの日差しが、紫の花に照り輝く、その姿はまさに美しい女性に見えると言うような表現をするわけです。あの、表現力の豊かさはじっくりみる観察力から来ていると、そういうことですよ。岸边に立って、川の流れをみる。その泡は出来て消える所に、命の尊さを鴨長明は感じる。

みなさん最近何かじっくり見つめたことありますか。忙しい、心を亡くして不安になって、人の目を気にしながら人の声気にしながら、劣等感と優越感のシーソーゲームをしながら。気にすることはないでしょう。時間をとって美しいものを見つめて、そこに浸ればいい。自然界のなかに入らなければ、自分の家に活けている花を見つめるだけでも元気くれますよ。都会で、俺も切羽詰まったときには、道端に咲いているたんぽぽに、俺疲れてるから元気頂戴って！一人でやってるから、周りの人はあいつおかしいんじゃないかなと思ってる。関係ねえよと。そういう間を作る事って必要ですよ。鴨長明は間を作る。そして彼は人間の問題は執着心だと。自分と向き合ってる時に学ぶ。人間

はみんな執着心の問題。

今おれが飛び跳ねたら引力の法則で、地面にひきつけられる。恋しちゃってる物が、互いに磁石のようにひきつけあうように、人間は執着心を誰もが持っていますよ。しかし度が過ぎると、己の首を絞めてしまう場合もある。そういう時にこそ、「間」が必要なんです。結局彼は、大きな豪邸でなくてもいい。方丈記の丈は一丈、二丈の丈。茶室の概念ですよ。草の庵を作って、春夏秋冬を体感しようと。彼はこういうんですよ。

春は藤波を見る。柴雲のごとくして、西方にほふ。

夏は、ほととぎすを聞く。語らふごとに死出の山路を契る。

秋は、ひぐらしの声耳に満てり。うつせみの世を悲しむほど聞こゆ。

冬は、雪をあはれぶ。積もり消ゆるさま、罪障にたとへつべし。

日本人のみんな俺に言わせるなよ。春は、藤の花をみる。藤の花は紫色で、紫色の花を見ていると、紫の雲にのった菩薩が西の方から、匂いとなって私の方にやってくるようだ。この表現力。ねえ。このロマンチックな表現力。夏はほととぎすを聞く。セントフランシス・オブ・アシシだけが、鳥と語り合ったんじゃない。鴨長明はホトトギスと語り合ったんだと。秋は日ひぐらしの声。あるいは蝉の音。ミンミン。6年7年地面に埋まってる蝉が、殻からでてくると余命は3日から1週間。汗だくになった熱中症が騒がれる夏。涼しい音色を送ってくれたのは、蝉の音色ではなかったではないか。日本人は蝉の音色で詩を書く国民だ。3日～1週間、全身全霊で、私たちに涼しい音色を送ってくれた蝉。そして雪化粧の山を見る時に、罪障の障害、罪

ある自分の心を見せられるようだと、日本人は自然をみながら、己と向き合い、己の心を見つめさせられ、謙虚になって、物は心でみるんだ。見える自然界の背後に見えない大いなる力があるんだと。結局先人たちはみな感じている。

あの難行苦行の浄土真宗の親鸞でさえ、結局宗教熱心になればなるほど、悟りを開こうとすればするほどわからなくなって、悩んで。彼も一歩踏み出して比叡山の山奥に入って自然と向き合う。自力では悟りを開くことは出来ないと思わなくてわけわかんないですけど。邪悪の番船きさせれば、功德の塩に一見あり。人生を川でたとえるなら、己の怨念とか穢れがどぶ川のように流れている。でもそのどぶ川も行き着くところは海の大海原。海の大海原に入ったら、汚いどぶ川も海の一部となって浄化される。結構俺、色んな話をする時に、俺は小さい頃、葉山の海岸でビーチで、母親に連れられて泳ぎに行った。といっても俺はカナヅチだったから浮き袋にしがみついて、海の中に入った。その頃も今の体つきと一緒に、美形の身体。あまり皮下脂肪がないから、冷たい水によって、毛穴が縮んで膀胱も縮んだ。でも海の真ん中で、海の家トイレは遠い彼方。あの小さな俺は悟った。海もおしっこも同じじゃねえか。海の中でおしっこした。そしたら、俺のイエローおしっこがブルーオシャンと共にブルーとなった。邪悪の番船きさせればと、こう話してたら、浄土真宗の僧侶さんが違う違うとしてました。俺たちの心なかにある色んな穢れもどうしようもない自分も、受け入れてくれる懐の深い、存在こそ他力であり阿弥陀如来なんだってわけさ。結局一生懸命悟りを開こうと頑張った。でも理想と現実のはざまのなかで、理想に向かう自分がいるのに、現実はそうじゃない自分に失望する。でもそこが大切なんだと。ああもう自分はだめだ。

諦める。ネガティブなニュアンスがあるけど諦めるとは、明らかに極めると言う意味だ。かっちょいいー。

何を明らかにするかと言うと、理想はあるけど、現実には理想に到達できない弱い自分があるんだと、素直に認めるんだと。明らかに極めた瞬間、一筋の光が自分に差し伸べられる。光は絶えず、分け隔てなくみんなに注がれている。しかし私たちは傲慢でかたくなだから、壁を作ってしまう、その光を遮っているだけ。でもその生き方に切羽詰まったときに、人間は謙虚になってその壁を崩されてしまう。崩れてしまう。その時に気付く。光は自分に注がれているんだという事を。そういうもんですよ、人間は。だから人生って難儀な物ですよ。色々なことがありますよ。生きる苦しみ、老いる苦しみ、病む苦しみ、死ぬ苦しみ。「生老病死」です。でも苦しみて中国からきた言葉で、古代インドのサンスクリットがルーツで、インドに苦しみという言葉はない。サンスクリットの世界では。思うに任せるという言葉がある。

思い通りにならない事が人生だ。

生きる事は思い通りにならない。

老いる事も思い通りにならない。

俺も週に5回ジムに通ってトレーニングしながら、今も、ついこの間まで3000キロ歩きましたよ。5が月で。毎回腹筋800回しましたよ。ナルシストだから。やっぱり表現者だから、俺の身体は楽器言葉は音色。言葉の音色を奏でるためには、楽器のチューニングが必要。腹筋800回ってナルシストの世界でやってますよ。見た目だけでもメッセージになるようにと、自分なりの表現者としての切磋琢磨



磨はしてますよ。でもね、やっぱり年は取ってきます。しわも出てきますよ。この前髪の毛といてたら、ブラシに俺の髪の毛いっぱいついてるんですよ。誰の髪の毛だ、おれのだ！やっぱり抜けてきているわけですよ。俺はいろんなカツラ被ってる人に、俺の知り合いで広島の人が出てその人がずっとアデランスかぶってたんですよ。アルマーニの服に、みんな高級車。なのに頭はアデランス。アデランスが歩いている。社長、そのツラつけてるとみんなツラかるよ。ツラだったとカミングアウトして、今スキンヘッドになってます。今まで、気が閉ざされていた。それがオープンになって気がばんばんでいて、ものすごい輝いてオーラがあるんですよ。ファッショナブルで。だからカミングアウトできたんですよ。人に言ってるだけじゃなくて、俺はどうするんだって話です。俺もいずれは、スキンヘッドにしようと思っています。髪の毛はぬける、歯は抜けてくる。

俺、アメリカのレスリングで、世界選手権のメンバーに選ばれて首の骨も折って、5番と6番を。特別な器具で固定されてるんですよ。雷のとき外に出れないです。それは嘘ですけど。半身不随になる寸前でした。そういうところを通らされたんですよ。年取ってくるとだんだん違うところが、崩れてくるわけですよ。おれ、アメリカで格闘技やってること、歯の手入れなんてしないで、虫歯なんて抜けばいいという感覚でした。そうすると、やっぱり穴が開くからあるお医者さんが、ボランティアで俺の事を応援してくれてた人で、ブリッジを作ってくれた。そのブリッジが、40年たつとぐらついてきて、取れ始めたんですよ。それで、歯医者さんにいったら、アーサーさんこれはもうダメですよ。どうします？インプラントにしますか？インプラントって1本70万するんですよ。4本で270万。ハーレー買えるじゃん。

もうちょっと安いのないのって聞いて、スナップオン入れ歯があると。今の歯を生かして、上から金をかぶせてスナップオンしてスナップアウトする。取り外す。俺は入れ歯＝ポリドントっていうのが嫌だった。俺の名前、アーサー・ホーランドだけど、ポリドントとは縁がない。結局、スナップオン入れ歯は安い。パーシャルポリドント使わないといけない。結局取り外していれなきゃいけない。家に帰って取ろうと思っても取れないんですよ。なんだよ、あのやぶ医者と思ったら、こっち側だった。記憶力もおかしなる。毛は抜ける、歯は抜ける、もう50代後半からおしっこも漏れる。バイクに乗ってるでしょ。脂肪がないから、寒くても我慢をする。だいたい俺は、ハーレーを満タンにして乗ったら、200キロおしっこにはいきたくない。200キロでガソリンタンク満タンにして、満タンの膀胱を吐き出したいわけです。そういう訳にいかなくなったんだよ。寒いと40キロぐらいで、おしっこって感じなんだよ。もう、俺の時代はひざを痛めたら、ウサギ跳びで治すって時代だから、我慢しちゃうわけ。乗りながら、全然かっこよくない。自然をみる感動もない。もう結局、おしっこは漏れる、歯は取れる。髪の毛抜ける。年取ってくると、そういう部分がゆるんできちゃう。現実に今体験している。どうにか、崩れないようにダムを支えようとしてトレーニングしてるわけです。生きる苦しみ、別れる苦しみ、病む苦しみ。また、死ぬ苦しみ。もう4つあるの知ってる？「愛別離苦」。愛してる人と別れ離れる苦しみ、愛し合ってたのに、別れる。これを「愛別離苦」。「怨憎会苦」。一緒にいたくない人といなきゃいけない苦しみ。結構、家庭を持っている主婦の中に、早く主人死んでくれないかな。その保険金で、ブティック開いて、第二の人生のびのび生きるんだと。楽しみに待ってるのか待ってないの

かわからないけど、そういう人もいる。こいつさえいなければ、もっとのびのびと勉強できたのに。この会社でもっとのびのびと働けたのに。こいつがいるから、結局俺にとってはストレスだ。「怨憎会苦」。一緒にいたくない人といなきゃいけない苦しみ。そして、「求不得苦」。求めても求めても得る事が出来ない。そして、「五陰盛苦」。言葉には言い表せないような、ため息の中に埋もれる苦しみ。生きる、老いる、病む、死ぬ苦しみ。愛してる人と別れ離れる苦しみ。いたくない人と一緒にいる苦しみ。求めても求めても得る事は出来ない苦しみ。言葉に表せないため息の中に埋もれる苦しみ。この4つがあわせて、「四苦八苦」というんですよ。俺に言わせるなよ、みなさん。

結局人生は四苦八苦なんだと。でも四苦八苦にせっぱつまったときこそ、逆にチャンスなんだ。己の弱さを知るチャンスでもあるけど、そっからたくましくなるチャンスでもあるんだ、と。人生70年80年といえども、29万2000日。70万800時間424800分。ちゃんと調べたんです。A型のてんびん座だから。命が削れていっている。人生を、無駄に生きるんじゃない。無駄に生きるんじゃない。どういう事かと言うと、無意味に生きるんじゃない。意味ある生き方をする。あなたが、存在する事は尊いことであり、あなたには生きる意味がある。人生に人生の意味を問うんじゃない。人生があなたに問うんだと。生きるという事は問われている事であり、その問いに答えていく責任が俺らにあるということです。あなたは、その問いにどうこたえていくのかが、あなたの生き方になるわけです。あなたのなかに、素晴らしい魅力がある。俺は信じてる。あなたがそれに気付いて、それが放たれていくときに、生きてて良かったなど、人生って捨てたもんじゃないと。あなたがいたから、勇気が与えられたという人が大勢いる事

をわすれないように。

今日は長い時間ありがとうございました。“Thank you very much ! ”

[第2回キリスト教講演会]

## 世界の市民として生き抜く力とは

姜 尚中



今日はたくさんお集まりいただきありがとうございます。私、桃山学院大学は有名な大学でよく知っていたのですが、こんなに立派なキャンパスの中にこのような大学があるとは夢にも思いませんでした。私が今務

めている大学は埼玉県、関西から見ると埼玉県はどこにあるのだろうかという人もいるかもしれませんが、本当に小さな大学で、学生数が2000数百名ぐらいの、非常にこじんまりとした大学です。今日ずっと周りを見て本当に驚きました。私もこういう大学であれば学びたいなという気持ちになったくらいで。そしてこういう席にご招待して頂いて、とてもありがとうございます。それで、今日はですね、世界の市民として生き抜く力ということで、そして大学側から世界の市民として生き抜く、そのための力とはどういうことなのだろうかそのことについて少し話をしてくれということだったんです。世界の市民、世界の市民というと、非常に有名なところでは、ドイツの哲学者のカントという人が世界市民という言葉をすでに言っておりました。だいたい人間には国の中で生まれると国の法律に従わなければならない。しかし同時に国と国との関係もある。更にもう一つ、世界市民という人

の立場もあるんじゃないか。これはカントの有名な永遠平和の法という中で、世界市民ということについて若干述べてるわけですね。なぜ世界市民、こういうことが今の時代に、私達にとって重要なのだろうか、しかしそれはキリスト教という観点から見てどういうことが言えるのだろうか、こんなことを今日少しお話をしたいと思いますが、この桃山学院大学のキリスト教精神の中に、重要なルートとして、自由と愛というという言葉が建学というか大学の基本的な理念として述べられているんですね。自由と愛と。これは非常に重要なことを我々に示している。なぜか。まずみなさんが自由と考えた時に、これは実は意外と非常に難しい問題を含んでいます。

何故かと言うと、自由という言葉ほど、実は人によってその解釈がかなり変わってくるからですね。今、朝日新聞を読まれるとお分かりになるのですが、夏目漱石という人が100年も前にころころという小説を書きました。これは新聞紙上に書いて、朝日は最近になってこれをそのまま復刻して、新聞紙上で連載をし、最近は三四郎という小説を朝日新聞の中で連載するようになりましたけど、その心という小説の中に、主人公の先生がこんなふう言うセリフがあるんですね。『自由と、独立と、己に満ちたこの原題に生まれた我々は、その犠牲として、この寂しみを味あわなければいけない』といった趣旨の言葉があるんですね。自由であること、独立独歩、そして、自分が大切。こういう時代の中で、なんでこんなに寂しいんだろう、なぜこんなに孤独なんだろうということを100年前に夏目漱石という人はある作品の中で述べているわけです。残念なことなのですけども、日本では今、毎年約3万人近くの方がこの社会から自ら退場される。また、3万人以上の方が孤独死ということが起きているわけですね。韓国に関しては

もっとひどい。これは 10 万人あたりの自らこの世の中から退場される方の数は OECD、いわゆる先進国クラブの中で、多分 1,2 位を争うほどのパーセンテージを出しているわけですね。もちろん先進国、とりわけ旧社会主義国だったハンガリーとか、そういうところも非常に高いです。しかし、これからお話する、イギリスやアメリカのようないわゆるアングロ・サクソン系の国々は、10 万人あたりの、自ら自死を選ばれる方々の比率が日本や韓国の 1/2 から 1/4 です。これは宗教的なバックグラウンドだけではないと思います。つまり、私達の今の社会を動かしている、あとから話をしますが、グローバル化と言われているもの。このグローバル化の一つのキーワードは競争力ということですね。大学でも経済でも、ありとあらゆる事柄について競争力を身につける。競争力を身につけて自由に競争しながら、自分の力を発揮する、それは国や民族や人種を超えて、国境を超えて、人々が移動して、そして自分個人として自立し、自分の能力を発揮する。それがグローバル化。ですから、グローバル化の時代は、その個人が、自分の能力、キャリアをアップすれば、どこに行ってもその人は自分の自己実現が測りうる事が出来る。こんなふうになっている。非常に激しい競争が起きれば、やはりその競争に疲れていく人や、競争から弾き飛ばされる人々も出てくるはずですね。そういうような、社会が最も激しいと言われている、アメリカやイギリスで、自ら死を選ぶ方々が、日本や韓国より少ないのはどうしてだろうか。どうしてアジアの社会はもっとウェットで、もっと人々の情が深くて、おもしろいがありが、という風に我々は考えがちなわけですが、現実起きてきていることは反対のことが起きているわけですね。

私の国際基督教大学時代に教えていた教え子、これは女性ですけ

ど、その彼女は今から数十年前に大学を卒業してずっと外資系で務めてきました。ゴールドマン・サックスということです。多分リーマン・ショックのリーマン以上に生き馬の目を抜く程に大変な競争社会です。その代わり、大変な給与が入ってくる。僕なんか追いつけないほどに、1年間に大変な給与をもらうでしょう。その代わり、少しでも成績が上がらなければ、クビになってしまう。そういう外資系の証券金融会社で務めるということは、大変なストレスでしょう。しかしそれに打ち勝っていくそれぐらいのタフな女性なんでしょうね。しかしそれが果たして幸せかどうかはわからない。でも普通私達は、若い学生諸君が、グローバル化に対応して英語の力が、様々なリテラシーを身につけて、そして国際的な舞台上で活躍できるようにと、そういうことを見事に成し遂げた女性が二十数年前、最近またひょんなことから出会うことになったのですが、やっぱり見ると必ずしも私には幸せなように見えない。なぜならば、私がやっている講座にひょこっと顔をだすようになりましたから、何かやっぱり飢餓感があるんじゃないか。

なぜそういうことを申し上げるかということ、自由と独立と己、これが戦後の日本が戦争の廃墟の中から目指したものだと思います。来年で戦後民主主義70年ですけども、私達の社会はまず自由でなければならない。信仰の自由、言論の自由、思想信条の自由。何をやるにも自由であることがもっとも重要な事柄なんだ。そして、自分がしっかりして置かなければならない。そして独立独歩でなければならない。みんないいことですね。しかしどうして寂しいんだろう。そうでなければなぜこんなに沢山の人が毎年3万人も自ら命をなくすのか。3万人以上の方々が孤独死という形で世を去っていかねばいけないの



か。こういうことを 100 年前に作品で表したのが漱石ですね。つまり漱石は自由というものが人間を本当に幸せにするのだろうか、しかし自由なしには人間は生きられない。しかしそれが必ずしも光り輝くように、人間に希望をもたらしてくれるわけではないということ、もう 100 年前にあたかも現代を見ぬいたかのようにして小説の中にその問題を主人公として語らしめているわけですね。皆さんが考えていただきたいわけです。

あの戦争が起きた時代、多くの人々は決して自由ではなかったと思うんです。自由が束縛され、物がいいたくても言えない。そしてキリスト教、これを信じているというだけでも場合によっては迫害を受けたり、ですから戦争が終わって、自由な時代がやってきた、みんなが本当に心から安堵し、自由という言葉に、フリーダムという言葉にととてもとても初々しいものを感じたと思うんです。しかし、今はどうでしょうか。ひところ、カラスの勝手でしょ。何をやってもいいじゃんということ。こういうことを一時期言われました。極端な自己決定論みたいなものが色んな問題として出てきた時代がありました。アメリカではリバータリアンという言葉で言っていますけど、そういう自由というものがじゃあ現実的に世界をどういうような世界にしているかというと考え、この自由の問題というのは非常に大きな点ですね。桃山学院大学は自由と愛と言われた時に、その自由は勝手気ままな自由ではないはず。じゃあ自由で何を語ろうとしたのか、絶対的に自由なのは神だけです。神のみが絶対的自由を持つということであれば、人間は神がなすことを忖度することはできない。神がなぜこういう不幸を人間にもたらすのか、紙がなぜ善人な人間に不幸をもたらし、そしてとてもとてもこの世の中で非道徳的な行為をしている人

間が90歳、100歳まで大往生できるのか、私達もよくわからない。昔の黒澤明という人の映画の中に悪い奴ほどよく眠るという映画がございました。なぜなんだろう。3.1の東日本大震災が起きた時に何の罪もない小さな子どもに至るまで津波にさらわれて亡くなるのだろうか。しかし、普段人のためにいいことをなしたことが1つもないような人が90歳、100歳まで大往生を遂げるのか。私も東日本大震災が起きてからすぐに相馬市に入りましたが、その時言われたのは「神も仏もない」と。神も仏もないではないか。それはあくまでも人間から紙ということを考えている。人間が思うように神様が行動してくれる。あくまでも人間という有限の存在が紙という絶対的存在を忖度する。これは明らかにそうではない。人間の自由というのは絶対的自由を持ちうる神から与えられたもの。したがってその自由には自ずから限界がある。ですからそういう意味で私は自由という風なことをこの桃山学院大学は上げられたのではないだろうかと私自身は勝手に考えております。

でも、漱石の時代はこの自由というものは、人間がいわば自分で判断をして、物事を決めていいこと。男性が女性を選ぶ場合も自由だ。女性が誰を好きになっても自由恋愛であるかぎり自由だ。人間は生きている限り自由に物事を判断し、自由に行動し、そして自由にいろんなことをやっていいんだと。でも、そういう自由をみんなが満喫しているようでいながら、どうしてこんなに孤独なんだろうかということですね、僧籍は何度も何度も作品の中で述べているんです。私は今、私達の社会の中で自由というものをどう考えるのかが今大問題になっているんですね。その自由、経済も自由に動かなければいけない、言論も自由にできれば、したがってヘイトスピーチをやることも

自由だ。言論の自由、出版の自由、思想の自由があるならば、その自由に関しては、誰も犯すことが出来ない不可侵の権利をみんな持っている。で、この問題に明確な回答が出てこない。これは非常に難しい問題ですね。しかし、自ら死を選ぶことも自由。自由におやりなさい、貴方が生きようが死のうが、私には関係がない。しかし、できるならば貴方がこの世の中で生きたくない、死にたいと言うのだったら自由におやりなさい。ただし、他人には迷惑をかけない。この社会から出て行ってください。もしそういうことを口に出さなくても、間接的にそのように多くの人々が思っているらしいと考えただけでも、私達は身震いがするほどに孤独になってしまう。この3万人の方々の多くは、決して自ら生まれて、自分で自ら死を選びたいと思った人々でないと思います。しかし1997年から、今日に至る15年以上にわたって、日本は確実に毎年3万人以上の方々がそういう自死を選んでらっしゃる。韓国においては人口規模が日本の1/2以下ですが、それでもかなりの数の人々。で、それを私達の社会は止められない。こういう時代状況の中で、自由ということをどう考えたらいいのか。先程申し上げたグローバル化というものはこの事由の問題とかかっています。皆さんはグローバルという、地球化という言葉は80年代、西暦で言うと、80年代の前半まで知らなかった。80年代のちょうど半ば、何が起きたかという、プラザ合意というもので、円とドルの為替レートが1/3に、つまり日本の円はドルに対して3倍の力を持つようになりました。我々は1970年台の初頭まで、1ドル360円、それがプラザ合意によって、日本の円はドルに対して3倍の力を持つようになった。これが80年台の半ばでした。その時から日本の皆さんは、NHKや新聞紙上にドルと円の為替レート、日経平均、ダウ平均、TOPIXとい

う言葉が、これは私達のテレビの中で必ず天気予報と同じように放映されるようになりました。NHK を調べていただくと、80 年代前半までそういうことはなかった。報道番組の中で最後は天気予報。しかし私達はテレビをひねれば地上波であっても BS であっても、あるいはブルンバーグは別にすれば、毎日新聞に為替レートについて、そして株価がどうなったかについて、必ず私達は目にする機会に今あるわけですね。こんなことが始まったのがほしい 80 年代後半からでした。そして 80 年台の半ば、一番人口に開所した言葉は国際化という。

じゃあ国際化とグローバル化はどうちがうのか。国際化というのは国内はみんな問題ない、国内はみんな同じだ。ただし、国の外側に異質な国々がある。そういう国々と国の際でどういう風にして関係を結ぶか。これが国際化でした。しかし今はグローバル化。私達の足元まで大きく変えようとしている。端的な例は東京都民の 1 人あたりの所得水準と、九州の例えば宮崎県の、あるいは青森県の所得水準。これは大変な格差になります。同じ 1 つの日本国民でありながら、どの県どの場所に住むかによって所得水準が大きく変わる。こんなことは少なくとも 80 年代なかばまではなかった。そうすると今のグローバル化は私達の生活の日常生活まで大きく変えるようになりました。こういう中で、人々は世界市民になりうるのではないか。グローバル化というものは国境を越えていく。国籍は関係ない、民族は関係ない、人種も関係ないはずだ。男であろうが女であろうが、一定の能力とスキルを持っていれば誰でも自分がなりたい職業につくことができる。そして活躍する場所は日本だけではない、大阪だけではない、東京だけでもない。もっと色々な所に人々は進出し、自分は活躍できる。だからもしかしたらカントが 18 世紀に夢見た世界市民が実現されるか

もしれない。こういうことをグローバルという言葉で、非常に輝かしく私達が述べる時にはそういうイメージを持っている。それを根底に突き動かしているのは自由です。家からの束縛、あるいは様々な女性に与えられていた束縛からの自由、あるいは民族や伝統や国家や、様々な束縛から自由になって、個人として、世界市民として世界のステージで活躍できる。そのために重要な言語的ツールが英語だ。こういう風に今の私達には一般的には言われている。

ただ、じゃあその自由とは何でしょうか。この事由の問題を原理的に最も深めて考えたのがやっぱり漱石だと言います。自由はその裏側に必ず個人というものを前提としている。漱石の言葉を使えば、セルフコンシャスネス、自己意識、自分が自分である、そういう個人というものが自由に物事を考え、自由に行動できる、そういう人々の集まりとして、社会というものが構成される。この時に、それぞれが自由であるがゆえに、相手がどう行動するかということを読まなければいけない。そしてそこに人間と人間との、今日の言葉で言えばコミュニケーションという、非常に重要になってくるんですね。じゃあそういう私達の社会、本来であるならば、みんなが情報端末、スマートフォンや携帯電話で世界まで繋がっている。クラウドを見ればどんな情報も端末から引き出すことができる。みんな繋がっている、世界が繋がっている。だとするならば本来はとてとても皆に信頼関係が世界まで広がっても不思議じゃないはずです。数十年前にコンピュータを駆使してそれを最も小型化して、そしてITチップスと一緒にあって、このような情報端末ができる。そう思い描いた人はこれによって世界がコネクトされてみんな幸せになる。みんなコミュニケーションが自由に出来て。でも実際はどうでしょうか。私達の社会はむしろ一面にお

いてつながると同時に相互不信感が広がっているんですね。私は一昨年ほど神奈川県の下子というところにある、カソリック系の女子高校のクラスで1時間ほど教えたことがある。その中で女学生が1クラス三十数人、そのなかで携帯電話を持ってなかった人は1人もいない。皆が携帯電話を使う。そして、コミュニケーション手段として、そのツール無しにはやれない。自由にそれを駆使できる。しかし、彼女たちが私に質問した第1番目の質問、そしてもっとも重要な質問は何かというと、『先生、人は何のために生きるんでしょうか』ということです。それはなぜかということそのクラスに1人残念なことに、これは悪性ガンの自分たちの友達がなくなってしまった。あっという間に亡くなってしまった。ですからその女学生の机と椅子は永久欠番のようにずっとそのまま置いてある。そしてこれまで皆が例えば自分が携帯電話で誰かに連絡をとったら1分以内に返事が来ないと、何かいろんないろんなことが言われるのではないか。こう思っていた学生たちが嫌がって、その自分たちの友人の死を通じて、もっともっと本当にいろんないろんなことを話したい。こういう雰囲気は教室の中にあふれるようになり、やがて様々なコミュニケーション、会話というものができるようになったと言う風に学生は説明してくれました。

今私達は繋がっているわけです。一方でたしかに繋がっている。世界と繋がっている。私もオーストラリアや韓国にいる友人ともインターネットを通じていつでも連絡をとれる。しかし同時に、私達の社会の中に、それとはまた別に、それを切断するように、様々な人々の罵詈雑言や、あるいはネット上の様々ないろいろな言葉が一方で書き連ねられたり、あるいは人と人が携帯端末をこれだけ持ちながらも、そこにもう一方で不安と不信感というものが両立している。そし

てひとがどう行動するかを常に警戒しながら、自分自身の行動を慎重に配慮していかなければいけない。こういうことを起きているわけです。つまりグローバル化は明と暗がある。漱石は草枕の中で、人生二十歳にして生きるに値することを知った。二十五にして明あるところ暗がある、三十にして人生楽しければまた困難も深しといったことを書いている。グローバル化はただ明るい面だけではない。その影の部分のをわれわれに突きつけているわけですね。それは今申し上げた自由という中で人と人が連帯をし、相互に理解を深めていく、その可能性だけではなくて、不信感と不安感が一方で増幅されているということです。漱石はそれからという小説の中でまた主人公にこんな風に100年前に『この社会には人が信じられない、そして神も信じられない。こんな国になってしまったんだ』という表現。これはなかなか手厳しいです。私の言葉じゃなくて漱石がそう言っている。それからの主人公の代助の言う言葉です。ある意味においてそれは一面当たっている。そこまで悲観的に思わなくて、一面において確かに心理を付いている。グローバル化というものは、常に明るい面だけではなくて、影の部分、私達にとっては、そういうネガティブな部分、否定的な部分をどっさり私達にもたらしつつある。

その一つ。これはエボラ出血熱はどこから出てきたか私はわかりません。もしかしたらアフリカの単なる風土病であったのか、でもこれがパンデミックになる可能性はないのか。果たしてこれは人間だけで、動物に感染しないのか、これは私にはよくわかりません。しかしこういうものが人を震え上がらせている面がある。また一方で、イスラム国という世界80カ国から様々な青年たちが武装勢力となってこの中東の地域に参集している。早晩日本からも韓国からも若者がそこに出

かけていく可能性は無いわけではない。私達はグローバル化の恩恵をタップリと味わっている。日本にいれば、世界で、それこそ食べられない食事はないくらい、世界の色々な国々の食べ物をたっぷりと食べることが



できる。また行こうと思えば、色々な国々にいける。また色々な国々と繋がる自由を持っている。しかし一方で、そういう現象がまた起きている。こういう時代の中で、非常に由々しいこと、それは自由であれば国境性を越えて色々な境界、制約を超えて自由にみんなが繋がる。世界経済はそうなっているわけです。世界経済においては、それぞれ人種は一切関係ない、宗教も関係ない、民族も関係ない。人種民族宗教男女も関係無い。マーケットという匿名のグローバルな空間の中では、どんな人間なのか、その人間の質は一切問わない。どういう能力とどういう役割を果たせるかに寄って、人間は評価されるし、お金にちょうど顔がないのと同じ。マネーの世界の中では、全てが平等。しかし現実には起きていることは、目のくらむような格差が起きている。

確かに私達は自由にマーケットにアクセスできる。しかしこの中で、マーケットを具体的には証券取引所を通じてこれまででそれぞれ、この参集されている方々の中で、自分は1/1000秒で10億のお金をマーケットから獲得できたという方はいらっしゃらない。でも東京証券取引所は1/1000秒で動いている。1/1000秒の違いで10億、20億いやもっと大きい場合には100億の違いをもたらす。私達はそれを、ある意味では当然のことと持っているんですね。マーケットというこ



のグローバルな空間の中で、みんなが自由に動いて、その結果として富がどこかに集中化され、そうでない人々が出てきてもこれは仕方がない。平等で自由な競争のもとに、結果として現れている事柄を人々は自己責任のもとにそれを刈り取らなければいけない。これもまた自由がもたらしたグローバルな世界の中の一つの現実ですね。で、こういう中で、私達は一方で世界市民の可能性を考えながら、もう一方で逆の現象が起きている。それは、お前は日本人なのか、お前は韓国人なのか、お前は中国人なのか、お前はアラブ人なのか、お前はアメリカ人なのかによって、その人がどう行動すべきであり、どんな存在であるかを先見的に決定されている。こんな考え方が一方で根強く出ているのですね。人間は宿命的に地域と場所と生まれた親をいわば産んでくれた親を選ぶことが出来ませんね。人間が選べない、なぜ黄色人種に生まれてきたのか、なぜこんな顔に生まれてきたのか、なぜ自分は白人でなかったのか、なぜ自分は黒人だったのか、なぜ自分の親はイスラム教徒だったのか、なぜ自分の親はキリスト教徒だったのか、これは子供によっては決定されない。しかし、今の私達の世界の中では、この非、つまり自由で無い決定権のない物によってその人のアイデンティティが決まる。そしてその人が属している共同体が、その人間にとって運命として背負わなければならない。日本人であれば日本を愛するはずだ。韓国人であれば韓国を愛するはずだ。中国人であれば中国を愛するはずだ。国を愛するのは当然である。国を愛し内人間自体は日本人ではない、韓国人ではない、中国人ではない。こういう考え方が一方で、全体では無いにしてもかなり強いいわば力を持って今、私達の社会の中に台頭していつつある。つまり私達はグローバル化の時代の中で、単純化していけば2つのベクトルの中に生きてい

るわけです。それはより広がり、より平等に、自由に人々の様々な属性や民族や宗教や男女の違いを超えた、より一般化された、こういうものを目指す力。それに対して、個別具体的にその人の属性というのが、その人間を決定する。どんな人種、どんな民族、どんな国家の中で生まれたか。だからこそ今、ナショナリズム。愛国心という名のペトリオティズム、あるいは場合によっては排外主義というものも。一方では全世界に各地の中に現れてきつつある。これはグローバル化というものが世界をフラットにして、地球は国境のないボーダレスな、いわばグローブになっていくというそういう考え方が実は妥当しない。世界は1つになっていくと同時に世界はもう一方で分断される。つまり1つになる力と、分断していく力が同時並行的に現れてきている。グローバル化の時代にどうしてナショナリズム、どうしてイスラム原理主義。これは普通考えれば水と油です。しかし水と油の関係が表裏一体となって、私達のグローバルな社会というものが形成されていると考える。

そう考えた時に、私達はこのグローバルな時代の中で、世界市民として生きるというのはどういうことなのか。それは本当にどこまで可能なんだろうか。その時に、大学というものはどういう役割を果たすのか、大学で学ぶということはどういうことなのか。こういうことをこれから私の考えている考え方を皆さんに少し披瀝したい。間違いなく今のグローバルというものをどう捉えるかはまだ回答がありません。ただ、グローバルには、明もあれば暗もある。光があれば影もある。一体化する側面と分断する側面。この2つが同時的に現れているのがグローバルだと我々は考える。漱石はこれを100年前なんと、グローバルとはなんと叫んだか。漱石はこれを「開化」と言いました。

文明開化の「開化」ですね。開く。閉ざすのではなく開く。あるいは啓蒙という言葉がより妥当するかもしれません。エンライトメントですから光を灯す。まだ光が行き渡っていないところに光を灯す。それこそ、数十年前では考えられなかったようなモンゴルの大草原の中でそれこそソニーかサムスンのスマホを使ってそこで夜空を写している。これはモンゴルの人がいるとするならばまさしくそういう世界になってきている。数十年前であれば、そのような電子情報や、エレクトロニクスと全く関係のない素朴で遊牧民らしい生活。こういうものを我々は思い描いたでしょう。しかし、パオの中にそれこそ最新鋭の電化製品が置かれている。そこで地球上で起きていることが全部見られる時代。つまり今まで光が行き渡っていなかったところにも全地球的規模で光が行き渡った。その走りが100年前。漱石はこれを自由の拡大、しかしこの事由の拡大は一方で人間を必ずしも幸福にはしない。自己意識、自意識に過剰な人間たちが生まれ、そして他者に対する信頼をなかなか作ることの出来ない、そういう人間たちがエゴイズムにまみれて、人間同士の様々な角逐や愛憎劇というものが展開される。しかしその中でも人間と人間とのやはりぬくもりのある関係がありうるはずだということを何度も何度も彼は考え、また書いているのです。今私達はあれから100年経って、ある意味ではそれが行き着くところまで来た状況になるかもしれません。

当時の朝日新聞は多分都市部で読まれていたでしょうから精々日本の人口の数%、今朝日新聞は800万部でしょうけど、漱石の連載小説の時代は精々数十万でしょう。でも100年前、都市化が僅かであった時代から、日本はこの日本列島の至る所にコンビニのないところがないくらいにインフラは整備されました。都市化されました。こうい

う時代の中で漱石の考えたことがより一般化されている。時代が漱石に追いついたんですね。こういう中で今申し上げたように、グローバル化とはいつから始まったのか。歴史的にはコロンブスの発見からという人もいます。まあ 16 世紀から始まったかは置いておいて、資本主義というものがやっぱりこのグローバル化の大きな牽引力であるでしょう。私はこれからこのグローバルの中で、世界市民としてまた大学はどんな役割を果たして、その中で学ぶということはどういうことなのかをお話したいんですけど、このグローバル化を牽引していく力、これがもし資本主義というやつで、その資本主義というものは自由主義、リベラリズムと表裏一体となりながら、私達に考えられないような豊かさというものをもたらしました。しかし日本は、この 20 年、失われた 20 年と呼ばれました。デフレが進み、1997 年から成長は精々 2～3%、その 2～3%も難しいという時代になり、少子高齢化が進み、私達の社会はどこへ行くのだろうか、多くの人々が不安に刈られている。そういう時代と言っても過言ではない。私自身は昭和で言えば、昭和 25 年、西暦で言うと 1925 年に生まれました。まさしく高度成長の申し子といえるでしょう。ただこの最も豊かであったと言われる 30 年間、日本で言えば 1956 年がもはや戦後ではないという経済白書が出た時に、この時に夏目漱石のところが文庫本として復刻されて。日本の国民が最も読んできた文芸書は漱石のところです。

この 1956 年から約 30 年間、1979 年にはエズラ・ボーゲルという人がジャパン・アズ・ナンバーワンと、日本は世界のナンバーワンになったと言われました。未曾有の繁栄を謳歌している。この 30 年間、この 30 年というのはどういう時代なのか。まず、そのことを少

し、ちょっと触れながらこれからのグローバル化を考えていきます。この30年、じゃあこれを200年、もしくは300年のタイムスパンで見た時にどう見えるか。これが今アメリカでもあるいはヨーロッパでも一台ベストセラーになっている、これはあるフランスの経済学書。21世紀の資本論という、この本を読んでもみますと、だいたい300年のタイムスパンで、イギリス、フランス、アメリカ、日本、ドイツ。この豊かさ、具体的には資産や所得がどのように分配され、どういう時代が最も平等だったか、第一次世界大戦と、第二次世界大戦と、とりわけ第二次世界大戦の後の先進国が最も平等な時代が実現されました。日本は世界に比べて最も平等な国だった。よく言われました。中流が最も層が厚く、みんな中流意識を持っていた。国民の9割近くは中流だと、上もなければ下もない。皆がそれぞれに可能な限り格差のない、そういう時代を日本は作ったのだと一時期言われました。しかしこれは、300年の歴史の中で、最もありえない稀な時代だったと。今私達の社会は日本はそれでもアメリカやイギリスと比べるとまだ、資産格差が少ない国かもしれませんが、資産格差が起きています。また所得格差も起きています。したがって生活保護世帯で生まれてきた子供は、次の世代も生活保護。平たく言えば蛙の子は蛙になる。これは封建制社会の原理ですね。お前は農民に生まれた、武士になろうなんてそんなだいそれたことを考えるな。農民は農民。商人は商人。これが蛙の子は蛙の子。

しかし自由な社会になって、私達は蛙であっても蛙でないものになりうる。こういうものが保証される時代がこの高度成長期の役30年間の。親よりは学歴を一步でもよくすればいい会社に入れる。大学はそのためのパスポート。したがって大学に入るのが自分の人生をより

良くしていくための最大のろ過装置。どんな人間も貧しくても貧しくなくても、ある大学を出ればその後、社会のいわばレールを走って行くことができる。こういう時代があったわけです。しかし今はそうではなくなった。しかし、そういう時代は実は尋常ではなくて、異常な時代だったということです。私達はどうしてもその時代を正常と考え、平等で、人々が比較的格差がない時代がこれが正常だったんだと、それを取り戻すことが大切なんだと、そのためには成長しなければいけない。そのためには成長があってはじめて豊かで幸福な社会が出てくる。このような思い込みから我々は依然としてまだ開放されていないわけです。でも私は日本において3%の実質成長率を遂げることも難しいとする。具体的に言えば4月、5月、6月だけで日本のGDPは7.1%近く収縮しました。7月8月9月だけを見てもそうだと思います。決して日本は実質成長率、これで3%くらいはいけるということは、今後も私はないんじゃない。では成長しない社会はダメな社会なのか。成長しない社会はみんな不幸になるのだろうか。グローバルでなければみんな不幸になる。そこに1つ私達は疑問を持たなければなりません。なぜ私達の社会は比較的高度成長期において平等だったのか。私のような出自の人間もそれなりの大学を出られて、そして大学院に登れる。こういう時代だったとすれば、それなりに平等な機会が与えられていた。でもそれは、戦争という巨大な犠牲を払ったからこそ、資産や所得が比較的平等な社会が実現された。日本人だけで300万、中国アジアにおいてどれだけの数の方が亡くなられたかわかりません。そういう巨大な殺戮が会って、はじめて私達の社会は、可能な限り、そのような戦争と、殺戮のない社会にしたい。平等で平和で自由な社会にしたい。資産についても可能な限り所得税やあ

るいは相続税をたくさんとって、国が試算を末代までそのまま継承していけるような不平等な社会にしたくない。こういう形で日本の社会は比較的中流層に熱い社会になって。しかしこの20年大きく変わりました。それを変えてきたのが冷戦の崩壊であり、冷戦の崩壊することによって世界はグローバルになりました。ロシア、モスクワにしようが、北京にしようが、東京にしようが、ソウルにしようが、どんな人もAppleのコンピュータを使えるし、Macもあるし皆が同じようなブランドを持ち、みなさんが世界のインターナショナルエアポートに行けば、売っているものはみんな同じです。ウイスキーからワインから、コスメティックから、ブランド品から、みんなおなじです。こんな世界になりました。つまりみんな、一つだねということを革新できる社会になる。

しかし一方において不平等はこれまで以上に広がりました。そして一方で様々な分断を私達に強いるようにこういうものがヨーロッパにもアメリカにも日本にもアジアにも広がりました。で、私はまずそういう時代だということを踏まえた上で、大学で学ぶということはどういうことなのかと。私は大学の中で教えていて、いい大学に入ったら、万歳。いい大学を卒業した。万歳。じゃあそこでいいところに就職した。万歳。そうでしょうか。私は例えば17年間東大で教えている時にこの場で900人の大クラスの中で、諸君はどんな企業に就職をしたいと思うか、何をやりたいと思うかと問うた時に、一番多かったのがリーマン、二番目がゴールドマン・サックス、三番目がサントリー、四番目がANA、五番目がTOYOTA、六番目が物産、七番目が外資系企業でした。その2年後リーマン・ショックが起きました。つまり東大を出て2年後彼らはリーマン・ショックで大変でした。つま

り十数年間かけて日本の偏差値の一番優秀だと言われる大学を目指して、朝から晩まで勉強漬けになり、やっと入り、そして卒業して、自分が一番いい大学を出たと思い、一番いい企業に入りたいと思っていた人が2年後には失業、転職を迫られている。これは非常にアイロニーですね。悲劇というよりアイロニーですね。皮肉としか言い様がない。こういうことが今から起きるか、起きると。今や私達のこの経済的なシステムは単調に高度成長期のように安定して、国がコントロールをして、経済政策を運営できる時代が終わりました。

グローバルということは、一面の局面において第一次世界大戦の前に戻るということです。いや、もっと極端な場合は、ディケンズのオリバー・ツイストの時代に戻るということです。これは間違いなく、資本というものは世界中に飛び交い、ありとあらゆるところに営利の機会があるならば、そこで様々なビジネスチャンスがもたらされている。それはこれまでの低開発国にとって非常に豊かになる可能性が与えられる。しかし一方で格差は広がるでしょう。そして、それぞれの個人を守ってくれるものがなくなるという。オリバー・ツイストの時代であれば、教導院で彼らを労働訓練させて、一部は守ってくれたかもしれませんが。高度成長期において個人を守ってくれるもの、それは会社でした。会社に努めている。社宅があって、そこで子供も生まれ、自分がなくなった後に子供もまた同じ会社に努め、そしてなくなったら社員の社葬をしていただいて、そしてひとつの企業が抱えているお墓に葬られ、こんな人生を歩んだ人もいます。日立、石川播磨屋、企業城下町ではそんな光景はざらにあった。しかし今はどうでしょうか。会社は一人の人間を終身雇用で、そして社員が疾病や病気、それ以外の様々な困難に合った時にどこまで守ってくれるのでしょうか。会社



というものがコミュニティのように感じられた時代、特定の優秀な企業に入るということは、その人が会社という共同体によって守られているということになります。ですから20年、30年の住宅ローンを作ってマイホームを作ってきた。そんな時代は終わりました。非正規雇用は、韓国は5割以上です。日本も4割を超えています。これから10年経てばどうなるか、私は多分非正規雇用はもっと増えると思います。もっと増えた場合にどうなるか。つまり、転職を繰り返す時代になる。特定の会社や企業に10年、20年務めるのではなくて、5年、長くて10年で転職をしなければいけない。あるいは会社を変わらなければいけない。つまり自分自身が問われる時代。私は、これは私達のように高度成長期に生まれた人間と違って、非常に困難な時代。自らをイノベーションしなければ生きていけなくなる。しかも社会保障や、年金や、あるいは老後の様々な蓄えというものが、ある人とならない人と根本的に変わってくる。お父さんお母さんが資産をたくさん持っている。資産を次の世代に継承される人と、全く資産がない、教育資本が等化されて大学を卒業すれば自分で働くしかない人、あるいは教育資本しかない人、こういう様々な格差が出てくる。この中で、自分自身で発奮しながら、自分自身でモチベーションを常に高めて、そして自己刷新していかなければ生きていけなくなる。

これは一言で言うと、タフでなければ、途中で挫折をしてしまうということですね。私は、人生は30年でもし終わるなら、良い大学に入り、そして良い会社に務めることだけをがんばればいいかもしれません。しかし私達の生きていかなければならない人生のコースはもっともずっと長くなります。こういう中で、いわば自分の長いライフスタイルの中で、そのような大きな変化を、様々なアップダウンをしてい

く時代にそれでもめげないというのはどうやったら作ることができる。私は学生諸君に一番必要なもの、それは、東大に入ろうが、それこそ東大以外の大学に入ろうが、どの大学に入ろうが、学生がある程度の学力があれば、私はその人の能力はそんなに大きな開きはないと思います。大切なことはモチベーション。自分がこういう風に行きたい、こういうふうにしたい。こういうふうなことをして、人に仕えて、そこに喜びを見出したい。自分はこんな風にして自己実現をしたい。そのために努力をする。このモチベーションが大学の中で果たして作れるかどうかが決定的に需要。大学院で預かっていて、最も大学院生に相応しくない、それは、「先生、研究テーマはなにを研究テーマにしたらいいですか」という学生。これはモチベーションがないということです。東京大学には言ってモチベーションをなくす学生はわんさかいます。目標喪失、何をしたいかわからない。私はやっぱり大学の時代の中で最も大切なことは自分でモチベーションを見出す。これが大学の中で最も必要なことです。

だから私はそこにキリスト教というものが重要だ。なぜか。キリスト教は一言で言えば、私は口野暮ったい言葉ですが、愛という言葉に尽きるということです。本学も自由と愛、じゃあその愛とは何なのか。抽象的な愛か、男女の愛か。決してそうではありません。イエス・キリストが十字架で貼り付けになり、復活したことがキリスト教の根幹にある愛ということです。これは具体的な形で実現されなければ。私の大学であれば、例えば、ケースワーカーになった。あるいは社会福祉士になった。あるいはメンタルな部分で様々な介護をしなければならぬ仕事について。その具体的な職業や仕事を通じてそれを実践する。抽象的なものではありません。ここで言ってるのは学者がそれこ

そ哲学として考えられた愛ではない。具体的に自分の行動を通じて、それは具体的に自分の与えられたミッションとしての職業やあるいは自分の具体的な人生の中での、具体的な局面に現れてくる。これを実践する。皆さん、東日本大震災が起きてどうだったでしょうか。原発事故が起きて私も放射能がそうとうあるところに行きましたけど、この光景を見て私自身心の底から思ったことは霞ヶ関は全くあてにならない。何が当てになるのか。自衛隊、警察、消防、あるいは地域社会の中で様々な活動をしている人であり、また様々なボランティアをやっている人であり、そして土木建築ケースワーカー、診療士、そういう人々です。そういう人々がいなければあの被災地を支えられなかった。霞ヶ関の官僚は中央にいて、それこそ采配をしているだけ。しかもまともな采配も出来ない人。それを考えると、人間の社会を誰が支えているのか。それは頭でっかちな官僚でもなく、テクノクラートでもありません。具体的に人と人との関係を日常的に接し、その中で人を支えていく仕事をしている人。皆さんも考えていただきたいのです。

たかだか 20 代の若者たちが遺体を 1000 体も 2000 体もみんな得手分けして引き上げて、それを洗って、棺桶に入れて、こんな仕事を警察や自衛隊や消防や医療関係者がやってきたわけですから、これは大変な仕事です。でもそういう人がいなければ、私達の社会は成り立たない。これは私達が交換言っているグローバルとはまた違う、かなりローカル。私はそれをグローカルと言っている。グローバルであると同時にローカルである。ですから、そういう人たちをしっかりと大学で預かって、そして具体的な自分のモチベーションを高めることを通じ、社会の中で自分の生業を通じて、キリスト教の愛というものを

個別具体的に実践する。これが私は今ミッション系の大学として聖学院大学というものが目指しているものです。私はだんだん若者の価値観は変わってきたと思います。アメリカでもハーバードやプリンストンを出て、ウォール街に行くのではなく、人々のために働きたいという学生が出てきました。日本でも自分は官僚になりたい。金融機関につとめたい。外資系に行きたいというよりは、むしろもっと日常的なところで人のためになり、喜ばれる仕事をしたい。こういう学生も一面では出てきます。私はそういう学生たちが、大学の中でしっかりとモチベーションを身につける。そのためにどうしても教養が必要です。教養という言葉ほど私達にとっては一番座りの悪い言葉です。教養という言葉聞いた途端にアレルギーがします。今どうして朝日新聞や岩波書店、私の同僚や所長のオカモトくんも友人ですけど、みんな四苦八苦している。どうして朝日、どうして岩波。大正デモクラシー期の教養主義をどこかで戦後引きずっているようなそういう出版社や新聞社が少しずつ少しずつ時代から取り残されているようなイメージが持たれているのはどうしてなのか。それは教養という言葉をもっと身近なものに出来なかったから。今岩波も朝日も変わろうとしています。教養、今まで教養と言ってきた言葉を日本語でもっと肌着のように身につけられるものにしたい。これは生きた現場の中で生きる教養です。私はそれを目指したい。じゃあ教養とはなにか。一言で言うと自分の弱さと強さを知ることが教養です。教養とは自分の中にある弱さと強さを知る。そのためには自分自身を客観化できなければなりません。今の大学に入ってくる若者たちが、非常に一般的に私たちの時代以上に難しいという点は、自らに、距離を置くということです。自分の強さと弱さを知るには、距離感がないと自分の強さと弱さは見え

てきません。自分の強さと弱さがわかってはじめて他者に対する強さと弱さがわかります。

並外れて自己愛に強い人、並外れて自分への自信がない人、であるがゆえに他者とのコミュニケーションが取れない人、こういう若者もいます。私はそのなかで、自らを客観化できるということは、自分の強さと弱さを知る。であるがゆえに他者の強さと弱さもわかる。やはり私達は大学生として、入ってくる若者たちがその根本のところからまず私はスタートが始まっていくと考えています。その時に、ミッション系の大学はなぜ必要なのか。今の日本がどうしてこういう社会になったのか。私は政治学を教えている時に学生諸君にまず聞きます。君たちは無宗教か。みんな無宗教と答えます。たとえ私のようなミッション系の大学に入っている、洗礼を受けた子は別ですけど、多くは無宗教です。じゃあ無神論かと聞きます。みんな狐に何とかのようなきょとんとした顔をします。無宗教ということは宗教について考えたこと。無神論は神を積極的に否定するということですから、明確な態度がそこに現れる。じゃあ諸君は無党派か。みんな無党派と答えます。一人だけある政党を支持してという学生がいました。その学生を見た途端 99%の学生は奇異の目で、変わった奴が居るという目で見ました。そうでしょうか。アメリカ合衆国に行けば、アメリカの学生諸君は、自分はデモクラとかレパブリカンか平気で言うと思います。イギリスに行けば自分はレーバーかコンサバかはっきりと言うと思います。ドイツに行けば自分はエスペデーかチェデーウーか平気で言う。アメリカに至っては、映画俳優は平気でオバマ応援演説をやったりする。つまりどんな政治的なオピニオンを持っているかという、これは独立した社会人として当然のこと。戦後の日本が今グローバル化の

中で私が非常に欠落していた部分はなにか。それは宗教と政治をタブーにしてきたということです。

企業や会社や地域や学校で宗教と政治については語るな。会社の取引先で宗教の話をした人、これは絶対的タブー。無礼講の中でもネタを話してもいいけど、政治と宗教は話すな。外国で無礼講で下ネタの話をスレばそれこそ馬鹿にされる。でも無礼講の時に政治や宗教の話をした途端にその人はバツが悪い人間とみなされる。小学校の時から大学生に至るまでこんなことは話してはいけない。こんなことに首を突っ込んではいけない。こんなことはタブーだ。このことを話題にするときには周りの顔色をうかがってみんなのマジョリティがどんな顔をしているかを見定めた上で、つまり空気を読んで自分の発言をしろと。こういうことが多くの多くの若者の中にもう普通のこととして。それが戦後の日本の中で再生産されてきた。みなさんイスラム国が話題になった時に、じゃあイスラムとは何かを知らずして、どうして中東で仕事ができるでしょう。

私はスーパーグローバルと言う前に宗教と政治について教えろと言いたい。スーパーグローバル、英語が喋れる。さあじゃあ中東へ行った。イランでパイプライン化何かの仕事をして、働いている人は、世界から色んな国の人が来る。そのベースにあるのはなにか。それは人間の信仰であり、何を信じているか。それを知らずしてグローバルな仕事ができるでしょうか。スーパーグローバルとは英語が喋れることなのか。そんなことで、今世界で動いているグローバル化のもう一つの側面、宗教がナショナリズムや民族主義ということに対して理解が持てるでしょうか。実はこういう風に私は大きな声で言っていますけど、1979年、私もだいたい同じようなものでした。79年、イラン

革命が起きました。留学先のヨーロッパで私はイランとイラクの違いもわかりませんでした。そこではじめてイスラミックファンダメンタリズム。イスラーム復興主義運動というものに触れました。イラン人の学生とも話しました。はじめて私はイスラームの洗礼を受け、今から約35年以上前ですね。この時はじめて私は目から鱗が落ちました。自分は大学時代に何を勉強してきたのか。世界の人口の相当な部分を占めているこういう人々に、何の知識も、カントの本は読めても、今ここにいる留学生のことは全く知らない。そう考えた時に、やはりグローバルというものは、そういうものに目を閉ざしてはわからない。またアメリカのティーパーティーがなぜ起きたのか。レパブリカンの中にどうしてキリスト教原理主義的な運動が起きているのか。これもキリスト教、あるいは福音派の人々についての理解がなければわからないはずです。

アジア最大のイスラム国家、インドネシア。インドネシア。じゃあインドネシアがアジアの大国になるとして、そこはなぜイスラームなのか。これも知らなければ。我々はビジネスすら出来ない。でそう考えていくと私は宗教と政治、これは人間にとって根幹的に大切なもの。これを客観的に議論はできる。大学の中でこの宗教を信じなさいでなく、客観的に政治と宗教を議論することはできます。東大の学生は日本での超エリートと呼ばれていますが、ほとんどディベートの力がない。自分の考えていることを、プレゼンテーションできない。これはただ単に英語力の問題では無いと思います。異質なものと、そこで向き合って、そこで異質なものと対峙し合いながら、世界の多様性というものを知っていく。それを通じて自分が客観化され、そしてはじめて自分の弱さと強さも見えてくる。こういうような場数を全然踏

んでいない。そう考えていくと、大学は私は広場でなければいけない。それこそ古代ギリシャの広場のように、そこで様々な討論が行われ、一人になりたい人は広場の隅で広場にいていい。しかし出来る限り皆で議論をする。福沢諭吉の言葉を使えば多事争論。ですから、私の大学はおそらくこの桃山学院大学もそうかもしれませんが、教師の数がかなり多いです。このために人件費はかなりかかっています。普通以上だと思います。しかしそういう少人数、あるいは広場の中で、やはり議論をして、そこではじめて広場の中で自分も加わって、やがて政治や宗教について、土台となるようなものの方や考え方を身につける。これが大学の1,2年でとても大切なことなんですね。そのベースがあってはじめて自分が児童学科に行って学校の先生になりたいかが、このためにこういうことがしたい。ですから1,2年間の総合の基礎教育とまゝ教養としか言いようがありませんけど、それをしっかりと身につけてもらうということはとても大切なことです。

私は小説の中で一番好きなのは漱石の『こころ』っていうものと、ドイツのトーマス・マンの『魔の山』というのですが、この『魔の山』っていうのはみなさんも知っている通り、舞台はダボス。あのダボス会議で有名なダボス。世界競争力会議、ダボスで決まったことが、グローバル化とか、あるいは英語力とか、あるいはコンプライアンスとかこういう言葉は殆どダボス会議で決まって世界に伝えられているんです。しかしこのダボス、かつてはサナトリウム。肺結核の人たちが最後にしを待つ場所。みんなの軽井沢と同じくらいの規模でしょう。人口規模は2万3000ぐらい。これが今、グローバル化のメッカになっている。有名な人々が1月かならずダボス会議に集まるでしょ。これはグローバル化のメッカになっている。しかしそれはかつてはサ



ナトリウムでした。そのサナトリウムを舞台にしてトーマス・マンという人は魔の山を書きました。そこに出てくる主人公はハンス・カストルプというごくごく平凡な青年です。その青年がやがて7年間、このサナトリウムで過ごして、実は化けていくんですね。化けるっていうのは幽霊の。とても純朴な青年がやがてそこにいる様々な我が師と仰げるような人々と交じり合い、そこで洗礼を受けながら、人々の様々な思想や考えやこの世の中の出来事についてのいろいろなもの見方や考え方を教わり、そして下山して第一次世界大戦の始まりですね。これは明らかに1人の青年が、魔の山という学校の中で色々な人と洗礼を受けて出会いながら学んで、そして戦場という現実の世界に、いわば踏み込んでいくようなもの。私は今の学生諸君もこの大学という、これは新しいダボスと行っていいかも。そこで様々な出会いをして、そしてやがてそこを後にして、鉄砲の弾の飛ばない戦場に送り出す。グローバルというものは、ある意味において厳しい社会です。勝ち負けがはっきりする社会です。単なる理想論だけでは済まない。負ければ敗者になる。そういうことを強いられる社会でもある。それでもめげない。自分が失業しても、それでもその次ネクストを考えて、自分なりにめげない。こういうようなことを大学時代に身につけなければ、皆さん人生が終わるときに大学のような自由な空間は人生のどこにあるでしょう。

今、中高年齢の方がもう一回学びたいというのはどうしてでしょう。仕事が終わって自分は高卒で終わったから1度でいいから自分はもう1度大学で学びたい。それ程にこの若々しい4年間は人生にとってとても大切な時期なんです。ここでしっかりとモラトリアムを過ごした人と、そうでない人とは必ず私は10年以内にはっきりとそ

の差が出てくると思います。どんな優秀な人も、この4年間をただただ就職のために過ごした若者は数年後ポッキリと折れてしまうんじゃないか。ポッキリと折れない。そして自分がいろんな変化にあっても、それでもめげない。こういうような若者であって欲しい。私の友人にある経済学者がいて、彼はわれわれの世代をなんと言っているかという、年金食い逃げ世代。そう言っている。我々は年金がおりる。多分この60代以上の方は多くは年金がおりる。しかし今ここにいらっしゃる20歳くらいの方は年金が出るとはまあ私は絶対おりるとは到底言えない。高度成長期の30年は我々にとっては黄金の時代だったと言えます。でも二度とそれは帰られない時間。そしてこれから新しくグローバル化の時代を生きていかないといけない。

そういう時に、大学は何を提供すべきなのか。小手先のものだけならば多分数年はもつでしょう。しかし若者は二十何歳で大学を卒業して、多くの場合それから60年近く行きている。そう考えた時にこの4年間を今申し上げたような大学の役割ってというのは決定的に私は重要だと思う。今はそこに自分の残された、時間を費やしたいと考えています。この桃山学院大学もそういう大学だと思いますし、やっぱり若者が今後大学を巣立って、どういうふうになっていくのか、この地域や日本の社会にとって決定的に重要な事です、我々は成長しなくても、社会がそう、明るくなくても、しかし、しっかりと生きられる。そういう風に覚悟を決めたほうがいいと思います。成長のバラ色のものを振りまいても、それはおそらくは幻に終わる。そういう風に私は考えていますので、私の考えているそういうことを最後に述べて、大学は遍歴の場所であるとしめます。ワンダーフォーゲルは渡り鳥ですが、グローバル化ということは一言で言うと皆が渡り鳥になるというこ

と。渡り鳥、なかなか渡っていくためにはやっぱり羽を動かして飛んでいかないといけない。疲れる。でも大学というつまり木でそこで学んだことは、ワンダーフォーゲルとなって飛び立っていく若者にとっては、人生のなかでもっとも重要な場所だということは、必ず後々わかるものだと思います。そんなことを大学で色々言いながら、個別具体的なことを、大学の授業の中でやっているということです。あまりまとまりはありませんが、私が言う世界市民とは必ずしも外国に行かなくても、この日本の地域社会の中で生きていくことが世界市民に通じるということを申し上げて私の話に代えさせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

## 講師略歴

### アーサー・ホーランド

1951年大阪府に生まれ。日本でハイスケールを終えた後、父の国アメリカへ。全米レスリング選手権チャンピオン（サンボ）2回、パンアメリカン選手権大会銀メダル。全米柔道選手権3位。23才で洗礼を受け牧師となる。

1982年に伝道のために帰国。1988年、ソウルオリンピック選手村の公認チャプレンをつとめる。その後、日本列島横断十字架行進を執行、7人で150日間、数十キロの十字架を担いで走破。後に韓国、アメリカでも同様のパフォーマンス



を繰り広げ、その様子を時事、共同、UPIなどの通信社が配信し、「刺青伝道」と評し話題を集める。また、モーター・サイクル・クラブ「ザ・ロード・エンジェルズ」を設立し、北海道から沖縄まで日本全国7支部を展開、多くのバイカーのフォロアーを持つ。

2012年、再度日本列島横断十字架行進を一人で執行。講演の合間を縫って半年間で達成。2013年四国4県も2ヶ月で巡回し、日本列島を網羅する。現在、アーサー・ホーランドミニストリー主宰。モデル・俳優としてもマスコミや映画などに出演。著書に「不良牧師・アーサー・ホーランドという生き方」（文藝春秋）、写真集「アイ・アム・アーサー！」（芸文社）、「エッセイ Words of Love」（ゴマブックス）、「不良牧師Ⅱ 鉄馬の旅」（アイシーメディックス）、「一ミリだけ難しく生きよう」（フォレスト出版）他多数。

## 姜 尚中 (カン・サンジュン)



1950年、熊本県熊本市に生まれる。国際基督教大学准教授、東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授などを経て、聖学院大学学長（講演会当時・現東京大学名誉教授）。

専攻は政治学、政治思想史。テレビ・新聞・雑誌などで幅広く活躍。主な著書に『マックス・ウェーバーと近代』、『オリエンタリズムの彼方へ』、『ナショナリズム』、『東北アジア共同の家をめざして』、『増補版 日朝関係の克服』、『在日』、『姜尚中の政治学入門』、『ニッポン・サバイバル』、『愛国の

作法』、『悩む力』、『リーダーは半歩前を歩け』、『あなたは誰？私はここにいる』など。共著に『グローバル化の遠近法』、『ナショナリズムの克服』、『デモクラシーの冒険』、『戦争の世紀を超えて』、『大日本・満州帝国の遺産』など。編著に『在日一世の記憶』など。小説『母一オモニ』、『心』を刊行。最新刊は『心の力』。

# 出 会 い

— キリスト教講演会・講和集 (25) —

2015年3月発行

発 行 桃山学院大学キリスト教センター

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL 0725-54-3131 FAX 0725-54-3210

印 刷 和泉出版印刷株式会社

〒594-0083 大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL 0725-45-2360 (代)



## 「桃山学院の学院章」

この学院章は、イエス・キリストの最初の弟子である聖アンデレ (St. Andrew) にちなんでデザインされている。「アンデレ・クロス」(X字型の十字架) は、イエスの教えを守り通して殉教したアンデレの偉大なる生涯のシンボルである。「<sup>セ</sup><sup>ク</sup><sup>イ</sup><sup>ミ</sup><sup>ニ</sup><sup>メ</sup>」(「我に従え」というラテン語) は、アンデレがイエスに出会った時に呼びかけられた言葉である。したがって学院章はアンデレのように最後まで「自由と愛」のキリスト教精神によって生きることを示している。

*St. Andrew's University*